

---

# 怠惰な先輩としっかり者の後輩。

APPLE

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

怠惰な先輩としっかり者の後輩。

### 【Nコード】

N8016U

### 【作者名】

APPLE

### 【あらすじ】

学生の街、朝美市。ここは人口のほとんどが学生の街でだ。そこに住む俺、夕霧慶介は平凡な日常を好む人より若干怠惰な学生だ。だがある出来事をきっかけに、街を警備している組織、学生警察ガードに所属する少女、石動逢と出会い……。

## 一話

助けてといわれた。

だから彼女を助けた。

そして俺は悪になった。

+

+

+

「あ、やべ……」

俺は夜飯を食おうと冷蔵庫を開けた。だが中はもの見事に空だった。学校の帰りに買出しに行くのをすっかり忘れていたな。

「はあ……。しかたねえ、コンビニでもいくか」

財布をポケットにしまいながら、俺は外に出た。

外に出ると空気の冷たさに体が少し強張った。春とはいえ、この時間帯はまだ肌寒い。俺は上にTシャツとパーカー、下はジーンズという格好だった。

「上にもう一枚着てくるんだっただな」

かといって、また家へ戻り上着を取りに行くのも面倒だ。

仕方なく寒さに肌を震わせながら、俺は少し足早に夜の街を歩き出した。

「……………」

夜の街は静かだ。時間はもう少しで午後九時になる。この時間帯は人通りが少ない。

普通ならばこの時間でも、仕事帰りの会社員やOL、そんな彼ら呼び込む客引きなどがいて、少なからず賑わいをみせているはずだ。

だがこの街は違う。

ここ朝美市あさみは人口の大半が学生という特殊な街だ。子供の自立心を高め、将来性のある人間を育成するという目的で国が作った街なのだ。

朝美市は東京都と埼玉県の境にある街をいくつか合併させた街でそうとう広い。

そのためか、この街には様々な学校がある。

たとえば医療、看護、美容、ファッション、デザイナー、美術、料理、製菓、工学、建築、IT、スポーツ、音楽、俳優や声優……

e t c

もちろん一般的な学校も存在する。

俺、夕霧慶介ゆきぎりけいすけは一般の高校に通う普通の学生だ。将来、特になりたいものもなく、やりたいこともない。とりあえず高校には行っておこうと思った。

俺のように一般の学校に通う奴は意外に多い。普通の学校に行き、時間をかけて自分のやりたいことを探していく、っといった感じだ。

まあそんなことはどうでもいいんだが、そういったわけで、この街には学生が多い。

学校も終わり、放課後に部活や、友達と遊びに行ったりしていた奴らもほとんどが帰宅している。翌日も学校があるため、わざわざこの時間に外に出る奴もほとんどいない。

そのため、この時間外に残っているのはごく少数だ。

そんな中俺は、駅前のコンビニに行くために近道である裏道を通ろうとしていた。普段からよく使う道だ。いままでここで事件があったり、不良がたまったりなどと言うことは無かったのだが……今日は違った。

突然、前から数人の男たちがあわてた様子で走ってきていた……

「なんだ？」

いきなりのことに驚いていると、

「待ちなさい！」

と、女の子らしき声が聞こえた。

よく見てみると、男たちの後ろから、一人の少女が走ってきていた。どうやら男たちは、あの少女から逃げているらしい。

そんな状況を観察していると、前方の男の一人が俺の存在に気づ

いた。

「おい、そこのお前！」

「ああ？」

いきなり男に叫ばれ困惑していると、

「悪いがお前を使わせてもらう！」

そう言って男が近づいてきたかと思うと、そのまま俺の背後に回り、抱きつくような形で俺の動きを封じてきた。

「なんだよお前ら？ ていうかいきなり抱きつくなよ、気持ち悪いだろ」

いきなりのことだったのでとりあえず不満を述べてみた。

「ハアハア……ああ？ なにぞけたこと言ってるんだ、こいつが見えねえのか？」

いや息荒いよ、気持ち悪いよ、しかも耳もとで喋んなし。

などと思いつつ、男の右手を見ると、そこにはナイフが握られていた。

それに俺がなにか言おうとするよりも早く、男が追ってきていた少女に叫んだ。

「動くな！ こいつがどうなつてもいいのか？」

言われ、俺の存在に気づいた少女の動きが止まる。

「くっ……！ ここにきて一般人まで巻き込むなんて……！」

少女が苦々しげな表情を浮かべる。

「へへ。さつきはよくも邪魔してくれたな。こんな時間まで学生警察の連中はご苦労なこつた。おかげでこっちはやりにくいったらね

えぜ……」

それを聞いて俺は納得した。

（なるほどな。こいつらを追ってた少女は『学生警察』<sup>ガード</sup>だったのか。）

この街には『学生警察』<sup>ガード</sup>と呼ばれる組織がある。学生警察は学生で構成されていて、この街で起こる学生による犯罪などの阻止、あるいは学生から依頼のあった問題を解決したりしている。いわば、警察と探偵を合わせたようなものだ。

学生警察に入るには難しい試験をクリアしなきゃいけないらしく、誰でも入れるわけではないと聞いたことがある。

学生警察に入ると、進学や就職の際に有利になったり、有料施設を一部無料で使用できたりといった特権があるらしい。

そういった組織がある一方で、反対によからぬことをする奴らもいるわけで……

「おい！ あの女が動けないように手足縛つとけ！」

俺を後ろから抱きしめ、もとい拘束していた男が指示を出す。

「わかりましたっ！」

男たちのうち二人が少女の元に行き、手足を縛っていく。

まあこんな感じでこいつらみたいな悪質な不良連中も少なからず存在する。

少女は男たちを睨み付けながらも、俺の存在があるためにおとなしくしていた。

それを見ながら俺は……

(はあ……。今日はついてねえな。飯はねえわ、男に抱きつかれるわ、ナイフで脅おどされるわ、そのせいで女の子が危あぶなそうだわ。ったく、俺は平穩に暮らしたいっつーのに)

そんなことを考えつつ、俺は冷静に回りの状況を観察していく。男たちの数は五人、うち二人は少女の元に、それと俺にナイフを突きつけてるリーダーっぽい奴。後の二人はその後ろに控えている。男たちの注意はいま、俺から外れている。

(しかたねえ……。やるか)

そう思い、俺は行動に出た。

「せーのっ!!」

俺は勢いをつけて後ろの男の顔に向かっておもいつきり頭突きをしました。

「へぶう!!」

男の手が緩んだ隙に、体の向きを変え突き飛ばす。男は鼻を押さえながらうずくまっている。

「てめえ、なにやってんだっ!!」

後ろに控えてた二人が怒鳴りながらこちらにやってくる。

俺はすかさず、姿勢を低くし、そのうちの一人の鳩尾に拳を叩き込んだ。

「ぐえっ!!」

一人がその場に崩れる。

(二人め)



「おらあ！」

もう一人が殴りかかってくる。

（大振りすぎだな）

俺は上半身を反らすだけでそれをかわし、同じように鳩尾に叩き込む。

正直この程度の奴ら相手なら俺にとっては赤子の手を捻るのと同じくらい簡単だ。逆に手加減する方が難しいくらいだ。

そこで、こちらの様子に気づいた残りの二人が走ってくる。

俺はいま倒した奴を、こちらに向かってくる男の一人に投げつけ、それを受け止め驚いてる隙に顔面を殴り付ける。

（四人め）

「あ、えっ？」

残りの一人は、自分以外がやられているこの状況に動揺し、動きが止まっていたので、同じように腹部に拳を叩き込み昏倒させる。

（終わり、か）

そう思った瞬間……

「あっ！」

という少女の声が聞こえ、振り返ると。最初に頭突きをした男が起き上がっていた。

「てめえ……！ なめた真似してくれてんじゃないか！ 覚悟はできてんだろうな！」

「いや、そんな逆ギレされても。先にナイフ突きつけてきたのお前じゃん」

「うるせえ！ そんなのしるカア！！」  
男は余計に怒ってしまった。

「なんで挑発するようなこと言っんですか！」

「いやだつて事実じゃん」

えっなに？ 俺が悪いみたいになつてんだけど……

少女の理不尽な問いに答えていると……

「無視してんじゃねえ！！」

男が怒鳴りながらこちらに向かってくる。

「はあ………ったく。ほんとにめんどくせえ。悪いが、さっさと終わらせてもらっぞ」

俺は相手を迎え撃つため構える。

「うらあ　！！」

男がナイフを突きだしてくる。

俺はそれを難なくかわし、その手をはたき、ナイフを落とす。

(所詮素人だな。動きが単調すぎるぜ)  
すかさず顔面に拳を叩き込む。

「これで終わりだ！」

「ぶべっ！」

男は派手に吹っ飛んでいき、今度こそ起き上がってくることはなかった。

「はあ、かったるかった」

俺は脱力しながら少女の元へ行き手足の拘束を解いてやる。

「あなた、いったいなんなんですか？」

「なにつて？」

「普通の人がこんな人数相手にして、無傷で勝てるわけないじゃないですか」

そのことが。まいったな、どうごまかそうか……。

「あゝほら、あれだ。あいつら油断してたし、運が良かったんだよ」

「運だけでどうにかなるような状況じゃなかったと思いますけど」

「じゃああれだ、俺学校で空手部入ってるからそこそこ強くてさ」

「『じゃあ』ってなんですか、『じゃあ』って！？ それにもしそれが本当だとしても、刃物を持った相手に平然と向かっていけるとは思えません！」

「あれはほら、無我夢中でそれどころじゃなくて……」

「……いまいち納得しかねるんですが」

(しつこいなあ。細かいことをぐちぐちと)

そんなことを思いながら、俺は少女の拘束を解いてやる。そのままこれ以上追求される前に俺がその場を去ろうとすると……。

「待ってください！ まだ貴方には聞きたいことが……！」

少女の制止の声が聞こえたが……

「わりい、俺晩飯買いに行かないといけないから。じゃー！」

そう言っただけはそのままそくさと逃げ出した。

「ちょ、ちょっとなんなんですかそれ……！」

そう言っただけ少女は一瞬、俺を追おうか迷っていたが、不良たちを放つてをくこともできず、迷ってるうちに俺はその場を逃げた。

「はぁ……酷いめにあつたぜ。たくこっちは面倒ごとは御免だつての」

そう文句を言いながら俺はコンビニの中を歩いてた。

あの後裏道を出てから俺は、本来の目的である晩飯を買いに来ていた。

「とりあえずさつさと飯買って帰るかな」

俺は晩飯に弁当と明日の朝飯用にパンを持ってレジに向かった。

「合計616円です」

女性の店員に言われポケットから財布をだそうと手を入れたのだが、そこにあるはずの感触が無い……

「……あれ？」

あわててほかの場所も探ってみるが、やはり見つからない。

「……」

「……」

無言の状態が続き、俺は……

「……テヘッ」

とりあえず照れ笑い。

すると店員さんも

「ニッコ」

笑顔を返してくれた。かと思いきや、そのまま商品を持ってレジから出ていきすべて棚に戻していく。

そしてまたレジまで戻ってくると、笑顔のまま俺に向かって、

「ありがとうございますあ」

「えっ………?」

「ありがとうございますあ」

「あの………」

「ありがとうございますあ」

「………」

「ニニニ」

「………またきます」

「そっいい俺はコンビニを後にした……。今日はホントについてな

い

## 一話

翌日、俺は学校の教室の机に頂垂れていた。

「はあ………」

結局飯にはありつけなかった。昨日の夜から水しか飲んでいない。普通の健康的な男子としてこれは由々しき事態である。

そんな感じで一人だれていると一人の男子生徒が話しかけてきた。

「おいおいどうした？ 今日はいつにも増してだるそうだなあ」

そう言っただけでやってきたのは、一年のときから同じクラスの東山大和ひがしやまやだった。俺は仕方なく顔を上げ、大和の顔をみながら……

「はああああああああああ………」

おもいつきりため息をついた。

「いやいや！ お前人の顔見て盛大にため息とか失礼すぎんだろ！？」

「気にすんなよ」

「いや気にするから！ こっち見ていきなりそんなため息されたら誰だっけ気にするから！！」

「うるせえなあ。いつものことじゃねえか」

「いつものことじゃねえよ！ そんなことされたことねえよ！」

「俺はいつも内心でため息ついてるぞ。『ああ、また来たよ』って。多分クラスの皆もな」

「え、なに？ 俺そんな嫌がられてんの！？」

「つけるな（笑）」

「つけねえよ！ 面白い要素がどこにもねえから！！」

「H A H A H A」

「笑ってんじゃねえよ!! …… はあ、俺これからどんな顔して皆に接すればいいかわかんねえよ……」

そういつて大和は落ち込み始めた。めんどくさい奴だなあ。

「朝からよくそんな騒げるわねえ」

そういつて声をかけてきたのは、これまた一年から同じクラスの神谷千里かみやぢりだった。

朝から時間をかけてセットしたであろう華やかな髪型に、綺麗に着飾った制服。なかなか綺麗な顔立ちで、いまどきって感じの女の子だ。派手な見た目だが不思議と近寄りがたいという雰囲気はない。

「騒いでんのは大和だけだ」

「お前が変なこと言うからだろ!」

「まあ大和がうるさいのはいつものことだけどねえ」

「お前までそんなこと言うのかよ!」

「だってそうじゃない。昨日だって朝から『新入生の可愛い子ランキング』とかいつてみんなで騒いでたじゃない」

確かにそんなこと言ってたな。

「あれはしょうがない。男なら、三年間しかない高校生活で一度は可愛い女の子と付き合いたい! だが去年の俺は残念なことにその夢を叶えることができなかった……。しかしっ! 新年度になつて新しい一年生が入ってきたいま、再び夢を叶えるためにああしてみんなで情報収集をしていたのではないか!!」

そう熱く語る大和は、そこはかとなくキモかった。

「ばっかみたい。男つてみんなこうなの?」

「当たり前だ! 可愛い女の子に興味のない男などいない!!」

「……慶介も、そうなの?」

少し控えめに千里が聞いてきた。

「なんだ嫉妬か？　そうかそうか、俺も罪作りな奴だな」

「　　は、はあ！？　べ、別にそういうんじゃないし！　なに勝手に話し膨らませてんのよ！」

千里がムキになって怒りはじめた。

「まあ安心しろ、俺は大和みたいにながつついてはいない」

まあ実際、興味が無いわけじゃないが、大和ほどがつついていっているわけでもない。いまはとりあえず平穩に暮らせていければそれでよかった。

「ふ、ふうん、そうなんだ……ま、まあ慶介だしね、そういうのはないか……」

「だからお前がいくら俺に好意をよせても問題ないぞ」

「……！　だから違うっつってんでしょっ……！」

「うぐっ……！」

空腹の腹に本気の腹パンだった。こいつはきついぜ……

千里は何かと手が早いのが短所だな……

「何だよまたやってんのかお前ら。一年から変わってねえなあ」

「いや、まったく……モテる男はつらい、ぜ……」  
思ったよりダメージはでかかった。

「そんで、結局お前どうしたんだよ？」

熱く語り終わった大和がそう聞いてきた。

「なにが？」

「いやいつも以上に元気なかったからさ」



「確かに、よくみるとなんか顔色も悪いしね」  
と俺の顔を見た千里も同意。

いやそれはさっきのお前の腹パンのせいだろ。というのは黙って  
おいた。

「実は昨日の夜から何も食べてなくな……」

「はあ？ どうしてだよ、ダイエットでも始めたのか？」

「そんなわけねえだろ、お前じゃあるまいし」

「いや別に俺も必要ねえけど……。じゃあなんでだ？」

「昨日の夜、飯買いに行く途中で財布落としたっばい」

「ホントに？ それはさいなんねえ」

同情の混じった目を向けながら千里が言ってきた。

「一応通った道は探したんだが無かった。暗かったし見落としたの  
かもしれないが」

「学生警察にはいったのか？」

「いや、ただだけ……」

昨日のこともあるから行きにくいしな。

「一応放課後にでも行つとけよ」

「まあ行けたらな……」

実際あんまり気は進まないんだけどな。

「そういうわけでお前ら、なんかおこれ」

「すでにお願いですらないな」

「顔見知りだろ？」

「友達ですらない！？」

「まあでも実際可哀相だし、おごってあげなくもないわよ」

「マジで？」

「ただし！ 今度あたしのお願い聞いてくれたらね」

お願いか。千里のことだからろくなお願いじゃなさそうだが……。

「この際おごってくれるなら何でもいい。俺にできることならな聞いてやるよ」

「ふふ、そうこなくっちゃ！ お願い楽しみにしときなさい」

「へいへい……あ、お前は無償な」

「なんで俺だけ……！」

こうして何とか昼飯にはありつけることができそうだ。持つべきものは友達だな。

そんなやりとりをしてる間に教師がやってきて、談笑していた生徒たちも自分の席に戻り授業が始まった。

十

十

十

そんなこんなでなんとか空腹をこらえて授業を乗り切り、昼休みになった。

俺は大和と千里と一緒に、買ってもらった惣菜パンを食べていた。すると教室の入り口の方でクラスメイトが俺の名前を呼んだ。

「おーい夕霧っ！ 後輩がきてるぞ！」

「ああ？」

後輩？ 俺に後輩の知り合いなんかいないはずだが……。

「あんたいつの間に後輩なんてできたのよ。部活もやってないくせに」

「さあ？ というより心当たりがないんだが……。まあ一応行ってくるわ」

そう大和と千里に言って俺は廊下に向かった。

廊下に出ると一人の少女が待っていた。もちろん面識はない……はず。

少女の容姿は、黒髪でショートカット、少し釣り目だが綺麗な顔立ちをしていて、なんだか少し猫っぽい印象だ。

制服の胸元には一年の証である青色のリボンをしている。確かに後輩なのだろう。

だがやはり俺はこの学校で彼女と知り合った記憶はない。彼女が一方的に俺のことを知っているだけなのかもしれないが、そもそも俺は部活には入っていないし、特に目立つ生徒でもない。どういった経緯で知ったのだろう。

などと考えていると、少女の方が先に話しかけてきた。

「こんにちは、夕霧先輩」

年下とは思えない凜とした声に少し生真面目な口調で彼女は挨拶してきた。

「とりあえずお前誰？俺に何の用？」

「私は一年の石動逢いすのふみあひといいます。今日は先輩に届け物があつて来ました」

「届け物？」

「はい」

そう問い返すと、石動はスカートのポケットから黒い少しくたびれた二つ折りの見覚えのある財布を取り出した。というか俺の財布だった。

「あつ！俺の財布！！」

「失礼ですが中身を少し確認してしまいました。でも中に学生証が入っていたのですぐに先輩のだと分かりました」

「いやあ〜さんきゅ〜！ 助かったぜ。でもどこでこれを？」

そう俺が問うと石動は、少し顔を引き締め改めて俺に向き直った。

「そのことで先輩に少し聞きたいことがあります……」

なんかよくわからないが、あまり楽しい話じゃなさそうだ。

石動は昨日のことについて語りだした。

「昨日の夜、駅前で不良グループによる一般生徒への恐喝行為があったのを知っていますか？」

「いや、しらねえけど……」

それと俺の財布に何の関係があるんだ？

そう思っていると、石動は話を進めはじめた。

「実は私、昨日その現場の近くにいたんです。なのですぐにその場に向かったんですが……」

「ちょっとまで……。なんでそこでお前が行くんだ？」

「あ、言い忘れてたんですが、私<sup>ガード</sup>学生警察に所属してるんです」

「へえ〜そうなのか」

学生警察ねえ……ん？ なんか引つかかるな。………まあいいか。

「それで、現場についてすぐに犯人たちを見つけたんですが、逃げられてしまって……。すぐに後を追ったんですが裏道に入られ、急いで追いついたんですが、そこでたまたま居合わせた一人の一般生徒が人質にされてしまったんです」

待てよ。どこかで聞いたことがあるような……というより体験した気が……

「私は人質をとられ、身動きできないように拘束されてしまったん

ですが……」

「ははは、ドジだなお前」

「……うるさいですよ」

「すみません」

めっちゃ凄まじいので思わず謝ってしまった……。  
年下の癖に凄い迫力だったな。

「つかまって危なかったのは本当です、けどそこで……人質にされていた生徒が、突然自分を捕まえてる男を突き飛ばし、そのまま意図も簡単にその場の全員を倒してしまっただけです」

……そこまで聞いて俺は確信した。昨日の夜俺が遭遇したのは石動達だったのだ。

石動は探るような視線で俺を見据え、たぶん一番聞きたくったであろうことを聞いてきた。

「それで確認なんですけど、昨日の夜、あそこにいたのは先輩……ですよね？」

やっぱりそうか。石動はそれを確認するためにわざわざここまで来たのか。

いや待てよ、でも何で俺だって思ったんだ？

「それは、昨日の現場にこの先輩の財布が落ちていたからです」  
痛恨のミス！！まさかここで財布が出てくるとは……。  
まあばれちゃったのならしょうがないか……。  
別に意固地になって隠すようなことでもないしな。

「確かに昨日のは俺だ。だけど別にやましい事は何も無いはずだぞ。確かに少し過剰防衛だったかも知れないけど……」

でもナイフまで突きつけられたんだ、多少過剰でも正当防衛にな

るはずだ。

「それは私も認めます。ですが話はこれだけじゃないんです……」  
そう言っただけでも言いにくそうに石動は言葉をとぎる。

何か嫌な予感がする。こういう時の勘は大抵あたるんだよなあ……

…。

そしてやはりその勘は当たってしまった。

「実は昨日のことを学生警察ガードに報告したら、その……なぜか先輩を  
学生警察につれて来いと……」

「はあ！？ 何で俺が？ 別に何も悪いことしてないだろ、お前だ  
ってそういったじゃねえか」

「私にもよく分からないんです……。ただ今日の放課後、先輩を連  
れてくるようにと朝連絡があつて……。なので先輩、放課後私と一  
緒に学生警察ガードにきてください」

「いやだ断る」

とりあえず即答しておいた。

「も、もう少し考えてください……！ それにたぶん無理だと思  
います。今日私が連れて行かなくても、いずれ学生警察ガードの誰かが先輩  
を連れにきますよ」

「マジで？」

「マジです」

「逃げたりしたら？」

「たぶん捕まえて強制連行されると思います」

「犯罪者かよ俺……」

最初っから俺に拒否権ないじゃん……

「それに、個人的にも先輩には聞きたいことがありますし……」

「彼女はいないぞ」

「誰もそんなこと聞いてませんが」

「すみません」

鋭い眼光に思わず謝ってしまった……

でも他に聞きたいことってなんだ？

俺が考えていると……

「すみませんが先輩、そろそろ教室に戻らないといけないので……」

「ん、ああもうそんな時間か」

時間を見ると、もう昼休みも終わる頃だ。結構話し込んでいたみたいだな。

「はい。なので話の続きはまた後ほど。それじゃあ失礼します」

「ああ、またな」

そう言っつて石動は自分の教室に戻っていった。

あれ？ 待てよ。結局俺行くことになってんの？

石動の奴もまた後で的なこと言っつてたし。

「はあ……めんどくさいことになってきたなあ」

### 三話

放課後になり、それぞれが帰り支度をし始め、教室を出ていく。俺も遅まきながら帰る準備をしていると、大和と千里がやってきた。

「慶介、放課後どっか寄ってかない？ どうせ暇でしょ？」

今日はバイトがないらしい千里が寄り道に誘ってきた。

ちなみに千里のバイトはこの街にあるチェーン店のファミレスのホールスタッフだ。本人曰く評判がいいらしい。あくまで自称だが……。

「いこうぜ慶介、財布も戻ってきたしパーツと騒ごうぜ！」

昼休みに財布が戻ってきたことは二人に報告済みだ。

なので行くことはできるのだが、なにぶん財布が戻ったからといってそんなに余裕があるわけでもない。

「ん〜どうすっかなあ……」

などと考えていると突然背後から声がかげられた。

「夕霧先輩」

「あれ、石動？」

振り返るとそこには、先ほど財布を届けてくれた張本人である石動が無表情で立っていた。

「どうしたんだ、こんなところで？」

「先輩を迎えにきました」

「迎えに？ ……あ、ああ！！」



「忘れてたんですか？」

少し不満げな表情で石動が言ってきた。

すっかり忘れていた……。そういえば放課後に学生警察ガードにいくとか言ってたっけな……

正直気は進まないのだが迎えにまでこられてしまったては逃げようもない。

仕方ない、千里たちの誘いは断るしかないな。

「悪い、俺この後用事が……」

「慶介、その娘誰……？」

俺が断りの言葉を述べようとしたら、妙に低い声で千里が聞いてきた。

「ああ、そっぴや紹介してなかったな、こいつは石動。昼に俺の財布を届けてくれたやつで……」

「ふうん……」

千里が不機嫌そうだったので、これ以上俺が喋るよりも自分で自己紹介させた方がいいと思い、石動に目で合図を送る。それに気づいた石動が改めて自己紹介する。

「えと、はじめまして、一年の石動逢いといたします」

少し戸惑いながらも自分の紹介をする。

それに習い、大和と千里もそれぞれ自己紹介をした。

「あたしは神谷千里、よろしくね」

「俺、東山大和！ よろしく！ いや、それにしても逢ちゃん可愛いねえ、噂どおりだよ！」

「いえ、あの……」

困ったような表情で大和から距離を置こうとする石動。というか大和キモいな……

とりあえず俺は気になったことを聞いてみた。

「なあ？ 石動って有名なのか？」

そう俺が聞くと、大和が自慢げに喋りだした。

「そりゃあこれだけ可愛いんだ、有名にもなるよ！ いつもクールで大人びてて、それに加えて運動も勉強もできてしつかり者、それに面倒見もいと聞く。これは男子もほっとかないだろ！」

「ふう〜ん、そうなのか」

てかどっからくるんだその情報……。

でも確かに石動は見た目は美人だし、運動も勉強もできて面倒見もいいなら人気も出るだろう。

だからこそ学生警察なんてやっているのだろうか？

そんなことを思っていると、

「ところで慶介、石動さんとはどういう関係なの？」

どこか訝<sup>いぶか</sup>しむように千里が聞いてきた。

「どういつもなにも、石動には財布を拾ってもらったただけけど」  
まあ正確にはその上で怪しまれてるんだけど……

「ふうん、でもじゃあなんで放課後に慶介のことを迎えにくるのよ？」

「それは……」

その先を言おうとしたら制服のそでを石動に引っ張られた。

振り向くと石動は小声で、

（すみませんが先輩、これから学生警察<sup>ガード</sup>に行くことと、私が学生警察なのは黙っててもらえますか。変に意識されたり心配されると困るので……）

そう申し訳なさそうに言ってきた。

確かにそのとおりだと思ったので俺は軽くうなずいてみせた。

「なに二人でこそぞ喋ってるのよ……」

「いや別に……それよりなんで石動が来たのか、だろ。それはあれだ、財布を拾ったお礼をしようと思っただけで約束してたんだよ……」

「ふうん、お礼、ねえ……」

納得しかねるような視線で千里が俺を見ていると、それまであまり会話に入ってこなかった石動が、

「すみません神谷先輩、今日一日夕霧先輩を貸してもらえないでしょうか？」

そういつていきなり頭を下げた。

その行動に千里も驚いてしまったようで、

「あ、頭を上げてよ！ 別にいいわよそんなことしなくて！ 慶介は別にあたしのってわけじゃないんだし……！」

突然の石動の殊勝な態度に千里も面食らってしまった。

……というより本人の意思を無視して勝手に貸し借りしてんじゃねえよ。

「ありがとうございます。では申し訳ないのですが先輩を借りていきますね」

そう千里にお礼を言い、石動はこちらに戻ってきた。

「先輩、そろそろ行きましょう。あまり遅くなってもいけないので」「そうだな……」

確かに少し話し込みすぎていたようだ。教室にはもう俺たちしか残っていなかった。

「じゃあ悪いけど俺たちもついくわ」

「あんた、石動さんに変なことしたら承知しないわよ!」

「するかよ」

そんなに信用ねえのかよ俺……

「あと、あたしのお願いも忘れないでよね……」

「はいはい」

「ったく、財布が戻ってきたんだから買ってもらった昼飯代受けとつてくれればいいのに、なんでわざわざ「それはいいからお願いの方聞いて……」とかめんどくさいことすんだよ。まあ昼飯代浮いたのはラッキーっちゃラッキーだけど。」

「そんじゃ遊びに行くのはまた今度だな」

「なんだ大和いたのか」

「いたよ!!」

全然会話に入ってこないから忘れてた。存在感の薄いやつめ。

「んじゃまたな」

「失礼します」

「じゃあねえ」

「バイバイ!」

そう言っつて俺と石動は教室を後にした。

## 断章

「あいつなにやったんだ？」

「なんでも昨日不良連中が学校に来たらしくてさあ。その全員を病院送りにしたらしいぜ」

「俺遠くからだけどその現場見てたけど、あれはさすがに酷えよ」

「マジかよ？ そんな危ない奴だったのか」

「あんな奴だなんて思わなかった」

「人間なにするかわかったもんじゃないな」

「俺達もいつ同じめに遭うかわかんねえぞ」

「ったくなんであんなのと同じクラスなんだよ」

「よく平気で学校にこれるよな」

「いつも刃物とか持ち歩いてるんじゃない？」

「私達も関わらないようにしなないとね」

「……………」

俺は教室の一番後ろの窓際の席で、クラスメイトたちのそんな会話を聞き流していた。

一週間の停学が開け、久しぶりに学校へ来たものの、そこにもう俺の居場所はなかった。

俺は「不良達を問答無用でボコボコにし、病院送りにした危ない奴」というレッテルを貼られていた。

きっと俺が今更なに言ったところで誰も聞く耳を持たないだろう。それどころか会話すらできないと思う。

なので俺はもう真実を話すことすら諦めていた。話したところでやっぱり避けられはするだろうし。

俺はこの変わってしまった環境の中で過ごしていくしかなかった。

世界は、ほんの些細なことで牙を剥く。それが善意の結果だと  
しても……

## 四話

俺達はいったん別れてそれぞれの下駄箱で靴を履き替えてから校門の前で待ち合わせた。

「お待たせしました先輩、それでは行きましようか」

「あっ、そうだ！俺これから塾があるんだ。中間テストに向けて苦手な英語をリーディングからライティングまでみっちりやる予定だったんだ。いやあすっかり忘れてた。じゃ、そういうことで」

「くだらないこと言っただけで行きますよ先輩」

「……」

無表情で流されてしまった。俺はさすがごと石動の後をついていった。

「そっいや学生警察ってどこにあんだ？」

俺は学生警察の場所を知らなかったたので石動に聞いてみた。

「朝美駅の北口を少し進んだ所です」

「北口か。そっちの方は行ったことねえなあ」

というより、もともと俺はそんなに行動的でもないの、普段から限られた場所にしか足を運ばないというのもある。

「確かに南口と違って娯楽施設じゆくせしもないですし、特別用がなければ行かない場所ですね」

「できれば行かないままでいたかったけどな……」

その後しばらく会話もなく歩いてた。昨日今日あったばかりで共通の話題など思いつかず、俺自身普段自分から進んで会話をする人

間でもないので、一度会話が途切れると後には沈黙ちんもくが続くばかりだ。だがそんな沈黙を破るかのように突然石動が立ち止まり俺に話しかけてきた。

「先輩」

「ああ？」

突然の石動の行動に戸惑いつつも俺は返事を返した。

「昼休みに言ったこと覚えてますか？」

「昼休みに？」

「なんか言ってたっけ？ 長々と昨日ことについて話したのは覚えてるけど……」

「先輩に聞きたいことがあるって話です」

「ああ、そっぴや言ってたなそんなこと。なんだ？ 彼女ならいないぞ」

「それはもういいです……。私が聞きたいのは昨日の先輩についてです」

「昨日の俺？」

聞き返した俺に逢は神妙そつな顔で聞いてきた。

「はい。昨日の先輩の強さは異常でした。一人であの人数を相手にして、しかも勝ってしまった。とても普通の人にあんなことできるとは思いません。だからなんで先輩があんなことをできたのか気になって……」

「あゝそのことか……そっぴやこいつには昨日のを見られてたんだっけな。」

今更誤魔化すのも無理か。まあ少しくらいなら話しても平気か。

こいつに全てを話す必要はない。ただ変に勘ぐられるよりは多少話した方が面倒が無くていいだろう。



「まあ昨日のを見られてる時点で隠通せるとも思ってたし。いいぜ、話してやるよ」

そう言っただけ俺は自分のことについて少し話してやった……。

「俺の家は代々武道家の家系だったらしい。つってもそれは昔の話で、いまじゃ俺のじいさん位しかやってなかったんだけど……。んでまあいろいろあつて俺は小学校の低学年くらいからじいさん家に住んで武術を習ってたんだ」

「……そうだったんですか」

石動は驚きと感心の混じったような声で言った。

「しかもその武術つてのがこれまた特殊なものらしくてな。俺はガキの頃からそれを徹底的にじいさんに叩き込まれたんだよ」

正直何度死ぬ思いをしたかわからない。何度も骨は折ったし、夏休みなどに修行だといって山の中に放り出され、本気のサバイバルをさせられ餓死寸前まで言ったこともあった。そのせいで学校じゃ寝てばっかだったし、体育の授業なんかも体を休めるために手を抜いてやってたから成績はいまいちだった。

まあこの辺の裏事情は話さなくてもいいだろう。

この街に来てからはそういった修行なんかもなかったからのんびり暮らしてたんだが……

「でも昨日のは予想外だったな。俺はこの街に来てからはそういうのはなるべく隠して生活してきたから……。まわりに知られると余計ないざこざが増えて面倒なことになりそうだったし……」

昔のこともあるからな……

「あつ！でも先輩、私<sup>ガード</sup>学生警察に昨日のことを報告して……」

「ま、しちまつたもんはしょうがねえよ。別に絶対に隠し通さなきゃいけないって程のもんでもねえし。いつかはバレてたさ」

「すみません……」

石動は責任を感じているのか申し訳なさそうにそう言った。

別に謝られるようなことは無い。むしろ真実を話していない俺のほう<sup>が</sup>が糾弾されそう<sup>だ</sup>だ。

「気にすんな。別にお前は悪いことをした訳じゃない」

別に学生警察に知られたからといってどうこうなる訳でもないだろうしな。

「それから、先輩……」

「？」

「先輩に言っておきたいことがあるんです」

どこか緊張したような感じで、改めて俺に向き直った石動は、

「先輩、昨日は本当にすみませんでした！」

そう言っ<sup>て</sup>て頭を下<sup>げ</sup>げた。

「本当なら学生<sup>ガード</sup>警察である私が先輩を守らなくてはいけないのに、巻き込んでしまった上に助けてもらって……私は、学生警察失格です……」

石動は顔を伏したまま泣きそうな声で言った。

どうやら彼女にとって昨日のことは相当堪えたみたいだ。

守るべき人間を守れず、それどころか逆に助けられてしまったという<sup>こと</sup>。もし仮に、昨日人質にされてたのが普通の一般人だったなら犯人は逃がしてただろう。それどころか人質にされた奴が怪我

をしたかもしれない。真面目そんな石動のことだ、それが本当に悔しかったんだろう。

「お前馬鹿だな」

「なっ　！　人が謝って反省してるのになんですかそれっ！！」  
俺はかまわずに言葉を続けた。

「お前みたいな奴が一人でできることなんて限度があるんだよ。昨日のはそれを越えてたってだけ。たぶんお前以外の奴でも同じような状況になつてたはずだ」

「でもじゃあどうすればよかつたんですか!？」

「そんなの俺が知るかよ」

「こ、ここまで言っておいて無責任過ぎじゃないですか!？」  
確かに無責任かもしれないが、それは俺が言うことじゃない。

「俺は先生でもなけりやお前の親でもねえんだ。それくらい自分で考える」

「そんなの、わからないですよ……」

石動は小さな声でそう言った。

しっかりとそうに見えても所詮は十五、六の少女。まだまだしっかりと自分の足で立つことは難しいようだ。

「ったく、いつまでも終わったことをぐじぐじ考えててもしょうがねえだろ。そんなに責任を感じてんなら、もし次に同じようなことがあったときにちゃんと対応できるように考える。いつまでも同じ場所に立ち止まってちゃ成長なんてできねえんだ。しっかりとしろ、お前は学生警察ガードで、街を守らなきゃいけない。それがお前の役目だろ」

そういつて石動の頭を少し乱暴に撫でた。

ふと、ずっと昔にも同じように頭を撫でてやったのを思い出した

……  
あれ？ てか俺、今スゲー良いこと言ったんじゃない？

「はい……そう、ですね。私がいっかりしないと」

返事をした石動はまだ少し元気はなかったが、さっきまでのように悲観的な声ではなかった。

改めて見た石動はやっぱりまだ少女で、いま俺が言ったことはやっぱり少し荷が重いと思うが、それでも彼女は頑張るのだろうと思う。なんせ根が真面目そうだからな。

「……ふふ、先輩って意外に優しいんですね」

頭を撫でていると石動は、突然笑ってそう言った。

「はあ？ なにいつてんだ。別に優しくはねえだろ。柄にもなく説教くさいこともいつちまってるんだから」

「いえ、先輩は言葉は乱暴ですが言っていることはとても優しいと思います」

「いつてろ……。ほら、とつとつと行こうぜ。俺は早く帰りたいから」

「そうですね。すみません、時間をとってしまってます」  
そう言って俺たちは歩き出したのだが、

「先輩！」

呼ばれ、振り返った俺に石動は、

「昨日は助けてくれてありがとうございます！ 今日こそそれも言いたかったんです！」

そう言って笑った石動の笑顔はとても眩しかった。

「……気にすんな」

言いつつも俺はついつい視線を反らし、そのまま歩き出してしま  
った。

## 五話

なんだかんだありつつも、俺たちは学生警察にたどり着いた。  
学生警察をみた第一印象は、なんとというか普通の役所って感じた。  
飾り気の無い白いコンクリート壁に窓ガラスがついた面白味もな  
にもない建物だ。大きさは学校の体育館位だろうか。

「なんか思ってたより普通だな」

「なにを期待してたんですか」

「いやなんかもつとこう威圧的な感じの建物を……」

「そんなわけないじゃないですか。威圧するような建物じゃ依頼に  
来る人まで逃げちゃいますよ」

言われてみればそうか。でもまあ期待外れなのは確かだな。

「それじゃあ先輩、行きましょうか」

「気は乗らねえんだけどな」

俺は文句を言いつつ建物の中に入っていった。

入ってすぐに『それ』に気づいた。

「石動、いつもここはこんななのか？」

「こんなとは？」

「いつもと変わりはないか？」

「たぶん変わらないと思いますけど……」

……。

「どうかしたんですか？」

「いや、何でもない」

考えていても仕方がない。とりあえず目的地にいったみた方がよさそうだ。

石動に先導してもらい、俺は目的地に向かった。

「ここです」

そういつて連れてこられたのは、他の場所とは違い、やけに豪華な木製の扉がある部屋だった。よく見てみると扉の上に『所長室』と書いてある。

「えっ、なに？ 俺所長に会うの？」

「はい。私にもよくわからないんですが、所長室に連れてくるようにと言われました」

「ここに来てまさかの展開だな。てっきり取調室みたいなのに行くのかと思ってたんだが」

昨日から予想外のことが起きすぎてる気がするんだが。

「先輩、くれぐれも失礼の無いようにしてくださいね」

「任せろ。紳士の鏡とは俺のことだ」

「……激しく不安です」

そう言いつつ、石動は三回ノックしてから扉に向かって呼び掛けた。

「所長、夕霧慶介さんをお連れしました」

そう言つと扉の向こうからくぐもった声が聞こえた。

「入りたまえ」

それを聞き、石動が「失礼します」といって先に入っていく。俺も後に続くように入った。

「ちーっす」

そう言った瞬間、もの凄い勢いで石動に睨まれた。

「先輩っ！ さっき失礼の無いようにっていったばかりじゃないですか！」

「いやいやいやいや。いまのどこに失礼な点があったよ」

「全部ですっ！」

俺の行動全否定……

「めんどくさいやつだなあ。いいじゃねえかよ挨拶ぐらい何でも「よくないですっ！」

そんなやりとりをしていると、

「ふふ、君たちは仲が良いんだね」という女、いや少女の声が聞こえた。

「す、すみません所長！」

慌てている石動をよそに、俺は初めてその所長とやらを見た。そして俺の抱いた第一印象は……

「え？ なにこのガキ」

そこにいたのは、見た目中学生、もとい小学生でも通用しそうな感じの小柄な少女だった。腰まで届きそうなウェーブのかかった長い髪、目は大きく愛らしいという表現がぴったりだ。そして何より小さい。顔、手足、それに背も。本当にこいつが所長なのか？俺がそんなふうにいると、

「な、な、な……！」

「な？ なにそれ、お前の中での流行り？」



石動が『な』を連呼し始めたと思っいたらいきなり、

「なにいつてるんですかこの馬鹿っ!!！」

「うおわぁ!!！」

突然石動に大声で初めての罵倒をされた。

「馬鹿とはなんだ馬鹿とは。いきなり失礼な奴だな」

「失礼なのはどっちですかっ!! この人は先輩のひとつ年上でこの学生警察ガードの所長なんですよ!!！」

「マジで? こいつ小学生の『一日所長』とかじゃねえの?」

「違いますっ!! 真正銘この所長です!!！」

へえ、こんな見た目なのに所長なのか。しかも年上。みえねえ。

「すみません所長! 先程から失礼なことばかり。この人ほんと馬鹿なんです!! ですからどうか許してあげてください! 私が後でちゃんと言っておきますんで!!」

「お前さっきからマジで失礼じゃね?」

「先輩は黙っててくださいっ!!」

さっきからこいつ怒ってばっかだなあ。ここに来る前はなんかしおらしい感じだったのに。

そんなことを思いつつも、俺は言われた通り黙っていると、

「本当に仲がいいね……。別に構わないよ逢君。それよりもご苦労だったね、彼をここまでつれてきてくれて」

「い、いえ、これも仕事ですから」

そう会話をした後、小さい所長は俺に向き直った。

「夕霧君、君もすまなかつたね。わざわざ来てもらって」

「まったくだ。用があるならとっとと終わらせてくれ」

「そうだな……。すまない逢君、悪いんだが少し席を外してもらえ

ないか。彼と二人で話したい」

「え？ 二人で、ですか？」

そう言っつて石動は俺の方を不満そうに見てくる。

「なんだよ」

「……先輩がまた失礼なことを言わないか心配なんです」  
まるで信用してない目で俺を見てくる石動。

「心配しなくて大丈夫だよ。話はすぐに終わるから」

「所長がそう仰るのなら……」

そう言っつて石動はしぶしぶと部屋を出ていった。

## 六話

「それでは改めて。私はこの学生警察ガードで所長をしている皇慧華すめらぎすいかだ、よろしく。だが呼ぶときはできれば名字ではなく名前の方で呼んでくれ。皇というのはどうも敵つい感じがして女の子らしくないのでな」

そう言って小さい所長、もとい慧華は自己紹介をした。どうでもいいがこいつ態度でかいな（お前がいうな）。

「そんなことよりも、俺をここに呼び出した用件はなんだ？ こっちはいきなりこんな所まで連れてこられていい迷惑だ」

「それについてはすまないと思っている。だが今日はどうしても君に頼みたいことがあって来てもらったんだ」

「頼みたいこと？」

俺が聞き返すと、慧華は一拍置いてからこんなことを言ってきた。

「率直に言おう……君に、この学生警察に入ってもらいたい」

「……………はあ！？」

ちよっと待て、いまこいつなんて言った？ 学生警察ガードに入れと言ったのか？

「おいおい、なんでそんな話になる？ 意味わかんねえぞ」

「実はいま学生警察は人手不足でね、増えていく犯罪や依頼に対処しきれなくなってきているのだよ」

「だからってなんで俺が入らなきゃいけねえんだよ」

「昨日の報告は聞いたよ。あの犯人たちを一人で倒したそうじゃないか。それを聞いて是非君に学生警察に入ってもらいたいと思ったのだ」

「断る。そんな面倒なことは御免だ」

まさか昨日のことがこんな面倒なことになるとは思わなかったぜ。

「だが君の力は学生たちを守るのに大いに役立つのだ。是非力を貸してほしい」

「嫌だっつてんだろーが。他当たれ」

「どうしてもか？」

「どうしてもだ。第一、俺が人を守るなんて柄じゃねえんだよ……」

「ふむ？ それはもしかして過去のことに関係しているのか？」

「……………」

こいつ……

「悪いが君のことを少し調べさせてもらったよ。確か君は、前住んでいた町で、不良たちを病院送りにしたらしいね。その後君は学校中の生徒から恐れられ避けられていたと……。確かに少しやり過ぎだとは思うが、でもそれには理由があったそうじゃないか。君は助けを求められたからあのようなことをしたのだろう？ 君に助けを求めたのはそう、確か……」

その瞬間、俺は一瞬で慧華との間合いを詰め、すかさず首もとに手をそえた。これ以上なにかを喋ればすぐにでも絞め上げることができるように。

「！？」

多分こいつには何が起こったのかわからなかっただろう。気がついたら俺が目の前にいて、首を絞められそうになっていた、と。なにせ俺はこいつが瞬きするタイミングにあわせて移動したのだ。目を閉じて、一瞬俺の姿が視界から消えた瞬間を狙って。

「少しお喋りが過ぎるんじゃないか？ 俺は別に温厚な人間じゃない、気に入らない奴は女だろうが容赦はしないぞ」

俺はもう片方の手で顔をそらせないようにしながら、威圧を込め、

恐怖を植え付けるようにして慧華の目を見ながら言葉を続ける。

「あのことは俺が判断し、俺が実行したことだ。他人にとやかく言われる筋合いは無い。その結果がどうであれ後悔なんて微塵もない。俺は別に過去に執着するような人間ではないからな……」

そこで一旦言葉をと切り、首にそえてある手に少し力を入れる。

「ううっ!!」

「だが……だからといって、知りもしない他人に過去をほじくり返されるのは不愉快だ。それでもまだこの話を続けるってんなら容赦はしないぞ……」

最後にそう言ってから俺は慧華を解放した。

解放された慧華は、そのまま床に座り込み俯いてしまう。

俺が無言で慧華の反応を待っていると、

「ふう……う……っ！」

「ああ？」

「ふええええええええええん!!」

突然この小さい所長（年上）が泣き出してしまった。

ええ!?! つてかマジ泣きっすか!?!

見た目ほんと小学生（だが年上）みたいな奴が本気で泣いている。正直本物の小学生（実際は年上）を泣かしてるみたいで、なんか罪悪感が……。

そうこうしている間も彼女は泣き続けている。

「ふっ、ふえええん! ……うっ、う、うええええええええん!!」

「お、おい泣くなよ……お前仮にも年上だろ？」

「うえええええええええええええええん!!」

どうする、俺？　いつそほつとくか？　……いやいやそれはそれで後が恐いな。逆に更なる恐怖を与えて言葉もでなくするとか？　いや無いだろ。

とりあえずなにか言っしか……

「おい泣き止めよ、俺が悪かったって。もうなんもしねーから……」  
「ふえええええん！！」

ダメか！　くそうめんどくせえなあ。こっちが泣きたくなるぜ……

「なあ、どうしたら泣き止んでくれんだよ？　あれか、アイスとかお菓子とか買ってきてくりゃ泣き止んでくれんのか？　ほら、いいぜ何でも言えよ」

「ふえっ……えっ……な、なんでもお？」

「あ、ああ」

「ほんとになんでも？」

「いいつつてんだろ、なんでも言えよ。男に二言はねえ」

「ひっく……じゃ、じゃあぎょうむようのあいすとかでも？」

「ああ」

「とくだいさいずのぼてちでも？」

「ああ」

「おっきいくまのぬいぐるみでも？」

「しっけーぞ、いいつつてんだろ」

「じゃあがーどにはいつて」

「いいぜ」

……ん？

「さて、俺はいま何に返事をした？　こいついま『がーど』って言わなかった？」

「おいちよっ」

俺が聞き返すより早く、慧華が言葉を発した。

「よし！ 君の返事も貰えた。これで君は今日から正式な学生警察の一員だ」

いつの間にか泣き止んでいた（いやそもそも演技だったのか？）  
慧華は、さっきまでのような不遜な物言いでそう言ってきた。

「ちょっと待て！ いくらなんでもそりゃセコすぎんだろ！」

「だが君はさつき『なんでも言え』と言ったじゃないか」

「いやそりゃ確かに言ったが、それとこれとは話が別だろ？」

「男に二言は無いんだろ？」

「お前……」

「それでも断ると言うのならまた泣くぞ？ さつき以上に泣き叫びながら外に飛び出していくぞ？ そうしたら君はこれから、『小さくて可愛い女の子を泣かして、約束まで破った最低の男』だと後ろ指を指されながら生活していくことになるぞ」

「きたねえ……」

しかも自分で可愛いとかいってんじゃねえよ。

「ふふふ。それで、どうするんだ？」

ここまで脅しておいてなに言ってるやがんだこいつ……  
クソ、まんまとはめられたぜ……

「つち、わかったよ！ やりゃーいいんだろやりゃー！」

俺はそう投げやりに了承した。

「良かった、そういつてもらえて。ありがとう。………それとすまなかつたね、君の過去のことを……」

「その話はもういい。だが次同じようなことをしたらその時はなにがあっても容赦はしないぞ」

「わかっているよ。私ももう人前で泣きたくはないからね」

「え、お前あれマジで泣いてたの？ てっきり俺を騙す演技かと思っただぜ」

「っ！ し、しょうがないじゃないか！ さっきの君はその……本当に恐かったんだから……！ で、でもホントに泣いてたのは最初の方だけだぞ……！」

それでも、ねえ。

いやまあ確かに本気で脅すきでやったからな、恐怖を感じるのは当たり前かも知れないが。まさかマジだったとは……。

「ごほん！ で、ではこれからのことについて話をしようじゃないか」

そう言って誤魔化しつつ話を進めていく慧華。

はぁ……なんでこんなことになったんだ……。

こうして俺は学生警察ガードに入ることになった……

「少し待っていてくれたまえ」と言って、慧華は執務机の上にある電話で誰か呼び、五分程して現れたのは石動だった。

「それでは、これからのことについて話をしようか」

「……あの、ちょっといいですか？」

「なんだい？」

話し始める前に石動が待ったをかけた。

「結局夕霧先輩はどうなったんですか？」

事情を知らない石動そう質問した。



「ああ、彼今日から学生警察になったから」

「はあ、そうなんですか……………って、ええっ!？」

まあそうなるわな。でも驚きすぎじゃねえ？

「こ、この人が学生警察、ですか？」

「そうだ。彼の能力は学生警察には必要だと私が判断した」

「はあ……………所長がそう言うのでしたら……………」

石動はあまり納得してないようだ。俺自身、納得してないけどな。

「それから逢君、彼はまだ学生警察の仕事をなにも知らない。なので当分は君と二人で行動してもらおう。よろしく頼むよ」

慧華はさらりとそんなことを言ってきた。

「ち、ちよつと待ってください！ 私が教えるんですか!？」

言われた石動はめっちゃ動揺していた。

てか俺こいつに教わんのかよ。年下にものを乞うとかなんかちよつとあれだな……………。

「逢君、君も学生警察ガードに入ってるそろそろ一年だ。次は君が新人を育てる番だろう。いつまでも新人じゃいられないんだぞ」

「それは、そうですね……………」

それでも渋っている石動に、慧華は追い討ちをかけるように言った。

「それに、たぶん上手くやっていけると思うよ。ふふ、君は彼と一緒にのときはいつもと違ってとても楽しそうだからね。君があんなに感情を表に出しているのは始めてみたよ」

「なっ !？」

慧華の言葉に石動は一瞬にして顔を紅潮させた。

ほう、俺と一緒にいるのは楽しいのか。全然そんなふうには見え

ないけど……

「な、なにを言ってるんですか所長！！ そんなことないですよ！」  
「おや、そうかな？ 普段の君はいつもクールで、坦々と仕事をこなしている感じがするのだが。それにいまだつて……」

「うっ……」  
そう言われて石動は黙ってしまった。そういう反応するからかわれるんだつっの。

動揺している石動を見てるのは面白いが、少し可哀想だな。  
仕方ない、そろそろ止めるか。

「おい慧華、あんま年下苛めんじゃねえよ」

「おや？ 君はあまり動じないんだね」

「こんなことで動揺するほど純心じゃねえんだよ。それと石動のことをあれこれ言つてっけど、お前だつてさっきマジ泣きしてたじゃねえか」

その瞬間、慧華も石動同様、さっきまで意地悪く笑っていた顔が瞬時に真っ赤になった。

「っ！！ その事は言つなっ！」

慧華が物凄い勢いで抗議してきた。人のこと散々からかってたくせに自分に移つたとたんこれかよ。

「え？ 所長泣いてたんですか……？」

「逢君！ 君もそれ以上の詮索は禁止だ！」

慧華は必死になってこの話題を終わらせようとしていた。まあ自業自得だな。人を呪わば穴二つつてな。

ちなみに俺は、どちらか高みの見物だったけどな。

## 七話

あのあとなんとか二人は冷静になり（時間はかかったが）話が再開した。

「コホン！ いろいろ話が逸れてしまったようだが……それでは改めて逢君、夕霧君のことを頼んだよ」

「……はい」

結局、石動は渋々だか了承した。まあ俺としてもまったく知らない奴よりは、石動の方がやりやすくはあるけど。

「話は終わりか？ それで俺はこれからどうすりゃいいんだ？」

「そうだねえ、とりあえず本格的に仕事をしてもらうのは明日からとしよう。なので明日、学校が終わり次第逢君と一緒にまたここに来てくれ」

またここにくるのか……。面倒くせえ……

「つーことはもう帰っていいのか？」

「そうだね、一応話は終わったことだしこの辺でお開きとしようか」  
はあ、やっと帰れんのか。今日一日でいつもの倍以上疲れたぜ。

「逢君、君も今日は帰ってくれて構わないよ。今日の分の仕事はもうほとんど残ってないからね」

「え、でも……」

「それに、明日からはたぶん大変だろうからね……」

そう言っつて慧華は意味深な笑みを俺に向けてきた。

なんだ？ 俺が迷惑でもかけると思ってるのか？ まったく、どいつもこいつも失礼な奴だ。

「では申し訳ないですが、今日はお言葉に甘えさせてもらいます」  
「ああ、お疲れ様」  
そう言っただけで俺たちは部屋を後にしようとしたが、俺は慧華に言うておくことがあった。

「おい慧華」

「なんだね？」

「監視するならもう少し上手くやるんだな。あれじゃあバレバレだ」

「おや、気づかれてたか……」

「あんなあからさまに見られてたら誰だって気づくわ」

そう、ここに入ったときに最初に感じた違和感。それは不自然な視線と気配だ。

たぶん二人程だろう、入口からこの部屋の前に行くまでずっと見張られていたのだ。ほとんど人がいない署内で、あからさまに気配を消そうとしてるのが逆に目立っていた。

「すまないね、悪気は無かったのだ。だが昨日の君の報告を聞いた他の者が、どうしても君を確認したいと言うものでね。私としても気になっていたので許可してしまったのだよ」

「どいつもこいつも俺を買いかぶり過ぎだ。昨日の位、そこそこできる奴なら誰だってやれたさ。この奴だって不良や犯罪者と相対するんだ、そんな柔な奴ばかりじゃないだろう？」

まあ実際の程度の實力かはわからないが、少なくとも普通の人よりは強いだろう。

「私としては、君には期待してるんだけどね」

「はっ！ 言ってる」

期待するのは結構だが、その期待に答えるかどうかはわからない

がな。

「話は終わりだ、もういくぜ」

「ああ、また明日」

そう言っただけは扉の前で待っていた石動の所にいく。話の内容がいまいちわかっていない石動はしきりに首を傾げていた。

「ほら、いこうぜ」

「え、ああ、はい……所長、ではまた」

慧華は軽く手を振りながら俺たちを見送っていた。

俺たち二人は並んで帰路についていた。どうやら石動の家は俺と同じ方向らしい。

「まさかこんなことになるなんて思いませんでした……」

そう言っただけは石動はため息をついた。ため息つきたいのはこっちだつーの。いきなり学生警察ガードになれとか、無茶振りすぎんだろ。

「先輩、ちゃんとやっていけるんですか？」

「さあな。まあそこはこれからお前がしっかり俺を教えていくしかねえな」

「なんで教えてもらうのにそんなに態度が大きいんですか、もう……」

実際、これから石動に迷惑をかけるのは目に見えてわかっている。というよりかけまわると思う。

「それもこれも全部慧華のせいだな。あいつが変なこと言い出さなきゃ、こんなことにはならなかったんだから」

本当に余計なことをしてくれただけ、まったく。

「それはそうですけど、たぶん所長にもいろいろ考えがあるんですよ……。先輩には期待してたみたいですし」

「それが嫌なんだよ。俺は平凡で平穩な毎日を過ごしたいの。面倒事はしたくないんだよ」

「決まっちゃったものはしょうがないじゃないですか。それに私と一緒に働くんですから、先輩にはしっかりしてもらわないと困ります」

そう言っつて石動が窘めてきた。

「わかってるよ、ったく。あーくそ、慧華の奴、いつかもっぺん泣かしてやる」

そんな決意を新たにしていると、石動がじつと俺を見ていた。

「なんだよ」

「……さっきから気になってたんですが、なんで先輩、所長のこと名前で呼んでるんですか？」

そう表情、もとい感情の無い声で聞いてきた。なんか責められてるみたいだ……

「別に。あいつが呼ぶときは下の名前で呼べっつーからだよ。苗字は女の子っぽくないとかなんとか言っつて」

「ふうん、そうなんですか。所長が……。いいですけどね、別になに拗ねてんだこいつ。わけわかんねえ奴だな。

……ああ！

「なに？ お前も名前で呼んでほしいの？」

「な、ばっ！？ な、なに馬鹿なことを言っつてるんですか！ そ、そんなこと一言も言っつてないじゃないですか！！」

聞いただけで馬鹿呼ばわりされてしまった。別にそんなに深い意

味は無かったのに……

「あーまああれだな、俺としても名前の方が呼びやすくわあるしな。苗字だと四文字だけど名前なら二文字で済むし」

などと適当に理由を付けてみる。ぶっちゃけどっちでもいいんだけどな。

「べ、別に先輩がその方がいいなら、私はいいですよ……」

「はいはい、じゃあこれからは名前と呼ぶよ」

「どうぞお好きに」

そう言ってそっぽを向いた逢の顔が紅くなってたのは、たぶん夕陽のせいだけじゃないだろう。名前だけでなに恥ずかしがってんだこいつ。

「そついやお前ん家って何処なんだ？俺ん家もつすぐそこなんだが……」

俺の家は朝美駅から十五分程歩いたところにあるマンションだ。話ながら歩いていくうちにどうやら着いてしまったらしい。

「どうせだったら送るけど……」

「大丈夫です。私の家ももう見えてますから。ほら、あのマンションです」

そう言って逢が指差したマンションは、なんと俺の住むマンションの前にある大通りを挟んで、向かい側にあるマンションだった。

「近っ！めっちゃ近っ！なにこの偶然……」

世間は思っているよりも狭いと言っが、まさかこんな近くに住んでたとは。

「でもこれなら先輩がサボったりしないようにしっかりと監視できますね」

「え、ええ……」

そんな余計なオポジションいらねえんだけど……。俺の平穏な生活がどんどん脅おびやかされていく……。

「それじゃ先輩。明日から頑張りましょうね」

「はい……」

「ではまた明日」

そう言っただけは自分の家の方へと歩いていった。

俺はそれを見送ってから、とぼとぼと家へと帰っていききました。



## 断章

「お前はなぜ強くなりたいたいのだ？」

そう祖父は聞いてきた。それに対して僕は、

「大事な人を護るために！ その人が、悲しい思いをしないで、笑って毎日を過ごせるように。そのために、僕は強くなりたいたい！ 誰にも負けないくらい強く！」

胸に秘めた思いの丈を、祖父に対してぶつけた。

もうあの子に悲しい思いはさせたくなかった。あの子の泣いている顔を見たくなかった。情けない僕を見せたくなかった。あの子に誇れる自分になりたかった。

そのためにも僕は強くならなきゃいけない。誰よりも強く。

「生半可な気持ちじゃあやっていけないぞ。それこそ、死ぬ気でやらなければ……。その覚悟が、お前にあるか？」

祖父の鋭い、それだけで人を殺せそうなほどに鋭い眼光に射竦められ、僕は後退りそうになった。いつも穏だった祖父が、そのときばかりは鬼か悪魔のように見えた。

けど、だけどっ！ それでも僕は、

「強くなりたいたい！」

震える足で、いまにも逃げたしたい衝動にかられながらも、それでも一歩、足を前に出して僕は祖父にそう告げた。

「ふむ……よかるう。ならばお前の覚悟、しかと見届けさせてもらおう」

そうして僕の、俺の新たな生活が始まった。



## 八話

ピンポーン

「……………」

ピンポーン

「……………」

ピンポーン、ピンポーン

「……………」

ピンポーン、ピンポーン、ピンポーン

「……………」

ピンポーン、ピンポーン、ピンポーン、ピンポーン、ピンポーン

「だぁもうつるせえ!!」

人が折角気持ちよく寝てんに誰だつてんだよったく。

俺は仕方なく起き上がって、文句でも言つてやろうと思ひ玄関の扉を開けた。

「じゃかあしいぞコラア! 朝っぱらから舐めたまねしてつと全裸で縛つて表で吊るすぞオラア!!」

とりあえず第一声で脅しをかけてみた。

フツ、この俺の恐ろしさにびびってこれでちったー静かになるだる。

などと軽く悦に浸っていると、

「先輩、朝からセクハラですか……………」

そこには、僕らのクールビューティー石動逢さんが無表情で立っていました……

「で？ お前朝っぱらから何しにきたわけ？ まさか人の安眠を妨害するのが趣味な特殊な人間なのか？」

俺は不機嫌さを隠すことなく逢にいった。俺の安眠を奪うとは、まったく無礼な奴だ。

「なに馬鹿なこと言ってるんですか？ そんな趣味あるわけ無いじゃないですか。私はただ先輩が遅刻しないように迎えに来ただけですよ」

「ええ〜いいよそんなことしなくてえ……」

つたく朝から余計なことしてくれやがって。

まあ実際遅刻は多いんだけどな。

「つーかまだ七時半じゃねえか。学校まで十分もかかんねえんだから、あと三十分くらい寝てても問題ねえよ」

俺の家から学校までは徒歩十分ほどの距離しかない。なのでいつもはもつとギリギリまで寝ているのだ。寝過ぎすことも多々あるけど……

「ダメですよそんなの、遅刻ギリギリじゃないですか！ 先輩も今日から学生警察ガードなんですから、もう少ししっかりしてください」

「ああ〜そういやそうだったな……」

厄介なもんににされちまったなあ。別になりたくてなったわけじゃねえのに……

はあ……やだなあ〜面倒くさいなあ〜

「やだなあ〜面倒くさいなあ〜」

「先輩……」

「おっと、つい心の声が……」

「はあ……もう早く行く準備してください……」

「へいへい」

俺は逢にせかされながら準備をして、学校に向かった。

俺たちは学校への通学路を歩いていた。いつもと違う時間に通う道はなんか新鮮な感じだ。一人で歩いている奴、友達と談笑しながら歩いている奴、恋人同士で歩いている奴や自転車で通学してる奴……

「この時間は人が多いな。いつもの時間なら数人、もしくは誰もいないなんてこともあるからな」

まさに学生、って感じの見晴らしだ。

「それは先輩がいつもギリギリに登校してるからですよ」

「俺は常にギリギリの緊張感を感じながら生きていたんだよ」

「それで遅刻してたら意味無いじゃないですか……」

あきれた声でそう言われた。ごもつともで。

そのあと、とりとめの無い話をしながら歩いていて俺は気づいたことがあった。

「……なんか妙に俺たち視られてないか？」

学校に近づいて人が増えるにつれ、視線も増えてきている気がする

る。

チラチラとこっちを見ている奴や凝視してる奴、こっちを見ながらこそ話してる奴等などがいて、明らかに目立っている。

「そう言われてみればそうですね……。ん、先輩がこの時間に登校してるのが珍しいんじゃないですか？」

「いやいや、普段そんなこと意識しながら登校してる奴なんてないだろ……」

……。いやまてよ。「イケメンである俺が、こんな人の多い時間に歩いているから目立っているのかもしれない」確かにそう考えれば納得のいく話で……

「それはないですね」

「心を読むなよ、失礼な奴だな」

「いや、普通に声に出してますから……」

「おっと失敬」

本音が漏れてしまっていたようだ。

ふむ。だがその可能性が無いとするなら他には……。  
などと考えていると、

「おおい慶介ッ！！ これはいったいどういうことだぁ！！」

そう叫びながら、大和がこちらに向かってやってきていた。

「朝っぱらからうるさいぞ大和。近所迷惑だ、消え失せろ」

「ひどっ！ ってそんなことはどうでもいい！！」

どうでもいいのか……

だが大和は本当にどうでもいいのか、構わず言葉を続けた。

「お前、逢ちゃんと一緒に登校とは一体どういう了見だ！！」

なんてことを叫びながら言ってきた。

「どういうもなにも、別に好きで一緒に登校してるわけじゃねえよ。ただこいつが朝、勝手に迎えに来たから……」

「迎えにきただとお！！　なんだその羨まし過ぎる展開は！！　慶介、テメエ……！！」

「なにを熱くなってんだお前は……」

朝から元気な奴だなあ。若干うざったいけど……

「お前、朝からこんな可愛い娘が迎えに来て一緒に登校なんて……羨ましい以外の何物でもねえだろ！　俺だって、俺だって……」

そう言っただ和は泣き始めた。喜怒哀楽の激しい奴だ。見ていて飽きはしないけど。だが大和はどうでもいいが、その話に納得いくものがあった。

さっきからの注目を浴びるような視線。あれはそういうことだったのだ。

理由がわかると実にくだらな事だ。

ようは一年の中でも人気のある逢が、よくわからない男と一緒に歩いてたつてのが原因のようだ。確かによく観察してみると、こちらに視線を向けているのは大半が男子生徒だった。

「あの、結局どういうことなんですか？」

「こいつ案外鈍いなあ。」

まあこいつ自身、あまり自分が人気があるという自覚がないのも結果として伴っているようだ。

「先輩？」

黙っている俺を訝しんで再度声をかけてきた。

「いや、なんでもねえよ。とつとといこうぜ」

そう言っつて俺は学校への道を歩き出した。

「え、え？」

自分たちが視られていた理由がわからず、しかも泣き崩れている大和を残して歩き始めてしまった俺とを交互にみて、混乱しつつも結局逢は俺の後を追ってきた。

まあ理由を説明したところでどうにかなるわけでもないしね。わからないならわからないでもいいだろう。

「はあ……朝から面倒くせえなあ」

奇異な視線を浴びながら俺たちは学校へ向かった。

「俺を置いてかないでくれえ〜！」

……………。

あれから、視線の雨に晒されながらも学校へとたどり着いた。

逢とは昇降口で別れ、俺と大和は自分たちの教室へと向かった。

「それにしてもさあ、なんで逢ちゃんが慶介のこと迎えにきたんだよっ。」

ここで、俺が学生警察に入って、しかも逢とコンビを組んだせいだとは言わない方がいいだろう。一応逢には、俺たちが学生警察だということとはあまり公言しないように言われてるしな。

「たまたま家が近所だったらくてな。しかも昨日、俺が遅刻が多いつて話をしたからそれでだと思っぞ」

「家が近所だとお！？ かあ〜羨ましいなこの野郎！ 一緒に住まわせてください！〜！」

「断る」



「こいつと一緒に住むなんてうるさくて堪らん。」

そんな馬鹿な会話をしてる間に教室に着いた。いつもより早い時間に来たせいか、教室にはまだ半分ほどの生徒しかいない。

教室に入っただけで、大和は近くにいたクラスメイトと談笑し始めたので、俺はそのまま自分の席へといき、机に突っ伏した。

「あれ慶介？ 今日早いじゃない、珍しいこともあるもんね」

そうやって先に登校していたであろう千里が俺の側にやってきた。

「まあな、そういう日もある」

俺は顔を起こし千里に向き直る。

「そっぴや今日の一現てなんだ？」

「確か現国よ」

「そりやまた朝から眠くなるような授業なこって」

俺は早速、一現は寝ようと決め込んだ。

「そ、そっぴやええさあ、昨日はどうだったの？」

「昨日？」

「ほら、放課後石動さんと帰ったじゃない？ だから、あのあとどうだったのかなあ、なんて……」

そのことか。どうだったもなにも、ねえ？ クソ面倒くさいことに巻き込まれましたが。だが正直に言う訳にもいかず、俺は適当に誤魔化しておくことにした。

「まあこれといってなにも無かったな」

ホントはメツチャあつたけどね！！

「そ、そうなんだ……ふうん」

千里は一人で納得していた。

「でもこいつ、今日逢ちゃんと一緒に登校してきやがったんだぜ」

いつの間にかこちらにきていた大和が突然会話に入ってきた。余計なこと言いやがって……

「ち、ちょっと！　いまの本当なの！？　石動さんと一緒に登校したって……」

「しかも朝迎えにまできたらしいし」

「大和、お前もう黙れ」

こいつ朝のこと根にもってやがるな……

「ちょっと慶介！　聞いているの！！」

はぁ……朝から面倒くせえことばっかだなあ……。俺今日何回面倒くさいって言ったっけ？　まあいいや、数えんのも面倒くせえし。授業始まる前からどつと疲れたな、精神的に……。帰りてえ……。ギヤーギヤー騒いでる千里と大和をよそに、俺は切にそう願った

……

## 九話

現国、数学、生物と授業を終え、昼休みまで残すところ後一現。四現目は体育だった。

「次の体育ってなにやんだ？」

「確か短距離のタイム測定じゃなかったか？」

そんなことをクラスメイトが話していた。

「慶介、タイム測定だってよ！ 腕、もとい足がなるな！」

大和は以外に脚が速い。確か去年は学年五位以内に入っていたはずだ。特に部活などをやっているわけではないらしいが。まあこんな奴でも一つくらい取り柄があるもんだな。

ちなみに俺はいつも中盤くらいの順位だ。全力でやれば、大和には負けないと思うが、それで変に目立ってもあれなので、こういうときはいつも適度に手を抜いている。それに走るのって疲れるじゃん？

「早くいこうぜ慶介！」

「ああ」

俺たちはジャージに着替えてグラウンドに出た。

体育の授業は二クラス合同でやる。測定はそれぞれのクラスから出席番号順に一名づつ走ってタイムを測る。俺の名字は『ゆ』なので当分先だ。その間はグラウンドでサッカーをするらしい。

といってもボールを追いかけているのはサッカー部か、やる気のある生徒だけで、大半はその場に立って談笑したりしているだけだ。俺もその大半と同じく、端の方でボールを目で追っていた。（大

和は張りきってボールを追っている)

時折こつちに転がってくるボールを適当に蹴り返したりしている内に、俺の測定の番がきた。

一緒に走る奴は、短髪の爽やか系で、美形ではないが傍目にはカッコいい部類に入るだろう(俺のがカッコいいけど)奴で、いかにもスポーツしてますって感じの印象だ。でも隣のクラスなので正直よく知らない。

だが向こうは何故か俺のことを睨んでいた。

「おいお前！」

睨んでいた生徒、えーと名前は……吉岡(ジャージに書いてあった)が話しかけてきた。

「ああ？」

「お前、今朝石動逢と一緒に歩いていた奴だな？」

「ん？ ああ」

「お前には絶対負けない！！」

「……………」

……………さ

いですか。

まあ結果、俺は案の定負けました。もともと勝負する気もなかったけど。

走り終わった後、吉岡がメツチャ勝ち誇った顔でこつちを見ていたので、俺もお返しに満面の笑みを返してあげた。

あとで大和に聞いたたら、なんでも吉岡は野球部のエースらしく、女子にも結構人気がある奴らしい。そんな奴が逢にねえ。面倒な奴に絡まれたもんだ。

全員の測定を終え、時間も頃合いになったところで授業が終わった。

「とつとと着替えて一緒に飯買いにいこうぜ！」

今回もなかなかのタイムだったらしい大和は上機嫌だ。

「俺チキンカツサンドと玉子サンドに烏龍茶な」

「一緒について言ってるじゃん！」

上機嫌だった（過去形）。

今日の昼は大和と二人で食べていた。千里は他の女子と食べている。千里は交友関係が広いので、こういうことは多々ある。

「にしても、男二人で向き合って飯食うとかすっぱー虚しいよな…

…」

どうやら大和は不服なようだ。まあ確かに花がないのは確かだ。

「じゃあ女の子でも誘ってこいよ」

「誘えるような子がいたら、お前とこっして飯なんか食ってねえよ

！」

「おおっ……」

大和の剣幕に若干引いてしまった。

「なあ慶介、逢ちゃん誘ってこいよ」

「めんどいからやだ。それにあいつだって教室で友達と食ってたんだろ」

「それもそうだなあ」

大和は希望を無くして頂垂れてしまった。

そんなとき、昨日と同じようにまたもクラスメイトに呼ばれた。

「夕霧、また後輩来てるぞー！」

その声に大和は勢いよく起き上がった。

「逢ちゃんか？ また逢ちゃんなのか!？」

大和は嫉妬と羨望の混じった目でこっちを見て言ってくる。

「さあな。とりあえずいつてくる」

俺は声をかけてくれた奴に軽く礼を言ってから廊下にでた。

案の定そこにいたのは逢だった。

「あ、先輩!」

「なんか用事か？」

「はい、今日のことです」

今日？ あゝそっぴや今日も学生警察に行くんだっけな。めんど

……

「それで放課後のことなんですが、一緒に行こうと思ひまして」

「デートの誘いか」

「違います」

有無を言わせない鋭い視線で返されました。「冗談の通じない奴だ。

「それで？ どこで待つてればいいんだ？」

「そうですね……じゃあ校門の前でお願いします」

話はそれだけだったようで、「では」と言つて去つていこうとしていた逢を俺は呼び止めた。

「はい？」

「あゝその……お前、一緒に飯食わない？」

大和の為に一応声をかけておいたが、どうせ断られるだろうと思

っていた。だが俺の予想に反して、意外にも逢は戸惑いつつも「いいですけど」という肯定の返事をしてきた。

かくして俺たちは三人で昼飯を食うことになった。

ちなみに大和は泣いて感謝していたので、明日の昼飯を奢って貰う約束を取り付けた。

## 十話

放課後になり、俺は待ち合わせ場所である校門に行こうと教室を  
でた。

面倒な授業も終わり、放課後ということでは浮き足立ってい  
る。そんな中を一人、俺は足取り重く歩いていく。

一階に着いたとき、一年の下駄箱の前に逢の姿を見つけた。  
よく見ると誰かと話しているようだ。あれはさつき体育で一緒に  
走った吉岡とか言う奴だな。吉岡が熱心に喋りかけているが、逢は  
それを困り顔で応対している。それでも話続けているのを見て、と  
りあえず俺は逢たちに声をかけることにした……

ホームルームが終わってすぐに、私は教室を出た。

今日はあの面倒臭がり屋な先輩と一緒に初めて仕事をする日だ。  
正直不安でしようがない。あの人にちゃんとできるのかな？

先輩のことはよくわからない。まだ会って二日、今日を入れて三  
日しか経っていないから、わからないのも当たり前かもしれないけ  
ど。

ただ最初に会った　というより巻き込んでしまったと言っべき  
か……あの時の先輩は普段とは信じられない位別人だった。あの状  
況での冷静な判断、迷いの無い攻撃と動き。私も学生警察として、  
ある程度格闘技等の経験があるけど、先輩の動きは学生警察の実働  
の中で荒事担当の人達にも引けをとらないと思う。そう考えると本  
当にあの人は何者なんだろう。

でも感謝もしている。敵に捕まったとき、臆面には出さずに済ん  
けど内心では恐怖を感じずにはいられなかった。もともとあの人数  
を一人で追い掛けるのには無理があったと自分でも思う。荒事担当



ならまだしも、本来なら二、三人で動くのが普通だ。にもかかわらず私は咄嗟に一人で動いてしまった。結果捕まってしまったのは本当に救いようがない。自分の考えの甘さに辟易する……。

動きを封じてそのまま逃げるのならまだしも、もしそれだけじゃ済まなかつたらと思うといまでも体が震える。

先輩が助けてくれた時、私は心底ほつとした。それを悟られたくなくて助けてくれた先輩につきつい口調で答えてしまったのは本当に申し訳ないと思う。あの時すぐに御礼を言いたかったのに。だから同じ学校だとわかった時、実は少し嬉しかった。これであの人にちゃんと御礼がいえると思つて。実際には学校じゃ言えなかつたけど……

だけど学校であつた先輩は、助けられた時と随分印象が違つた。助けられた時は顔は暗くはつきり見えなかつたけど、それでもあの状況から助けてくれた先輩を少し格好いいと思つた。状況のせいもあつたかもしれないけど。

でも学校での先輩は、本当にこの人に助けられたのか疑いたくなるような人だつた。確かに顔はそんなに悪くない、寧ろいい方だと思つ。背も高いし。でもあのふざけているといふかなんというか……面倒臭がりだし、冗談とも本気ともつかないことばかり言つてゐる。その癖たまに良いことを言つたりするから困る。もう少し普段からしつかりしてくれれば良いのに……

そんなことを考えてるうちに一階まで着いた。靴を履き替える為  
に下駄箱の前まで来たときに、不意に声をかけられた。

「石動さん」

振り向いた先にいたのは知らない男子生徒だつた。上履きの色が赤色なので夕霧先輩と同じ二年生みたいだ。

「はい？ 私、ですか……？」

二年生の先輩が私になんの用だろう。それになんで私の名前を知ってるんだろう？ 多分初対面の筈だけど……

私が訝しんでいるのに気づいたのか向こうが名乗ってきた。

「突然悪いね。俺は二年の吉岡って言うんだ、よろしく」

「はあ、どうも……」

そう吉岡先輩が爽やかな笑顔で自己紹介してきた。

意図せず淡泊な台詞になってしまったのは私の性格上仕方ないことだ。もう少し愛想よくした方が良いのはわかってはいるけど、どうしても上手くいかない。私はあまり感情を表に出すのは苦手なのだ。それが知らない人と尚更。一種の人見知りなのだろう。

でも夕霧先輩にはなんだかんだで感情を発露してしまっている気がする。

なんでだろ？ 話しやすいのかな。少し考えてみたけどやっぱりわからなかった。

一瞬自分の考えに耽ってしまったのを吉岡先輩の声で我に帰った。

「どうかした？」

「あついえ、何でもありません……」

人と話している最中に物思いに耽るなんてなにやってるんだろう。

これも夕霧先輩のことを考えてたせいだ。まったく、いないところでも迷惑な人だ。そういもしない相手に文句を言ってしまった。

「そついえば俺のことは知ってる？」

「？ いえ、知りませんが……」

なんで初対面の私がこの人のことを知っていると思ったんだろう。

……あれ？ そついえば前にクラスの子が野球部の吉岡先輩がどうとかって言ってた気がする。この人がそつなのかな？

「あの、吉岡先輩は野球部の……」

「そうそう！ なんだやつぱり知ってたのか」

「いえ、直接は知らなかったんですがクラスの子が話してたのを思い出して……」

どうでもいいけどなんでこの人こんなに嬉しそうなんだろう？

「それで、私に何か用なんですか？」

なかなか話が進まないの自分から質問をした。

「ああ、そうだった！ 実は今日は丁度野球部が休みでね」

「はあ……？」

それがどうしたんだろう？

「予定もなくて、丁度帰ろうとした所に石動さんを見つけたんで声をかけたんだ。いや、実は前々から君と話がしたいと思っててね。よかったらこの後どこか寄ってかないか？」

そう吉岡先輩が誘ってきた。

でも私はこの後学生警察に行かなきゃいけないのでその申し出は受けられない。だからと言って無闇に学生警察のことは言えないし、とりあえず私は無難な言葉で断ってみた。

「あの、申し訳ないんですが今日は用事があるので……」

「それは今日じゃないといけないのか？」

「えっと、はい……」

私は早くこの場を離れたかった。大分話していたので結構時間が経ってる。夕霧先輩待たせちゃってるかもしれない。

それに知り合ったばかりの人とどこかにいくというのも抵抗がある。悪い人ではなさそうだが、正直私は吉岡先輩みたいな人は苦手だ。なので多分用事がなくても断っていただろう。今回は本当に用事があったからよかったけど。

でも吉岡先輩は簡単には引き下がってくれなかった。

「じゃあ他に予定の空いてる日とかない？ 俺もその日空けとくからさ」

「あの、ちよつとまだわからないです……」

これ以上時間がかかるのは不味いと思って、私は少し強引に話を終わらせようと思った。

「すみません先輩、私人を待たせているので……」

そう言った瞬間吉岡先輩の顔が苦々しいものになった。私、いま何か余計なこと言ったかな？

「……それはもしかして、夕霧慶介か……？」

「？ そうですけど……」

なんで吉岡先輩が知ってるんだろう？

それを疑問に思ったけど、それよりも早くこの場を去りたかったので、私は再度断りを入れて行こうかと思った……けどその前に、突然吉岡先輩に腕を捕まれた。

「あ、あの、ちよつと……！」

「君とあいつはどういう関係なんだ？ まさか恋人どうしってことはないよな？」

いきなり詰め寄ってきた吉岡先輩に驚いて、私は言葉を発せなかった。たけど、それを黙っていると勘違いした先輩がさらに詰め寄ってきた。

「なあどうなんだ？」

「いつ、痛……！」

腕を掴む力が強くなって思わず私は苦鳴をもらってしまった。流

石は野球部だけあつて握力も強いんだなと、場違いなことを思った。

「君は騙されてるんだよ！ あんな取り柄も無さそうな奴より絶対俺のが良いって！ 今日の体育の時だつてあいつは俺より全然たいしたこと無かつたし。良いところなんて全然無いじゃないか」

途中から独り言のようになっていた吉岡先輩だつたけど、私はその夕霧先輩を小馬鹿にしたような言葉にむっとした。

確かに普段はふざけてるかもしれないけど、夕霧先輩は大したことなくない人なんかじゃないし、私を助けてくれた。なにも知らないのにそうやって先輩を馬鹿にするこの人が許せなかつた。

私は捕まれてた腕を外すための行動をとろうとした。だけどその前に、私の腕を掴んでいる吉岡先輩の腕を誰かが掴んだ……

俺は逢の腕を掴んでいる吉岡の腕を掴んだ。そのまま掴んでいる手に力を込める。

「っ……！」

痛みで握力が弱つた隙に吉岡の腕を捻って背中に回し、突き飛ばした。突き飛ばしたつっつても軽くだよ？

そのまま吉岡を放つという逢に話しかけた。

「余計だつたか？」

「い、いえ……ありがとうございます」

逢は掴まれたところが痛むのか、もう一方の手で掴まれた部分を擦っている。時折見えるその部分は赤く指の後がついていた。まああの程度ならすぐ消えるだろう。

「それで？ この状況なに？」

事情がよくわからない俺は逢に説明を求めた。

「私にもよくわからないんですが、最初はどこかに行こうと誘われてたんです。それを断った後に夕霧先輩の名前が出て、そうしたら突然腕を掴まれて……」

ああ〜こいつ俺のこと嫌ってるっばいからなあ。それに体育のときもなんか言ってたし。

「まあいいや。それよりさっさと行こうぜ、遅くなると慧華の奴がうるさそうだ」

「え、ああ、はい……そうですね。というか先輩、まだ校内にいたんですね……」

逢が冷ややかな視線を向けてきた。

「いや〜実は五現の途中から寝ちまってさあ、起きたらホームルーム終わってたのな（笑）」

「はあ……授業位真面目に受けてください……」

「めんごめんご」

「……先輩、それ死語です」

そんなやり取りをしていると吉岡に呼び止められた。

「ちよつとまってっ!」

俺は仕方なく吉岡の方に気だるいげに振り向いた。

「お前、いきなりなにすんだ!？」

「いや、こいつが嫌がってたから」

「お前には関係ないだろ!」

「まあないけど……あ、じゃあ続きどうぞ」

「先輩……」

「冗談だって、そんな睨むなよ」

あんまりふざけてると逢が本気で怒りそうなので、とりあえずなにか言い訳を……

「あゝ悪いんだけどさ吉岡、俺たち今日はこれから大事な用があるんだよ」

「大事な用ってなんだよ」

「ヤベエ考えてなかった……」

「それはあれだ、俺とこいつの二人の秘密だ」

「そんなんで納得できるわけねえだろ！」

別に納得してくれなくてもいいんだが……

「つーかお前石動さんのなんなんだよ？」

「なにつて……なんなんだ？」

「私に聞かないでください」

「無責任な奴だなあ……オホン！ つまりそういうことだ」

「わかるわけねえだろ！ お前おちよくってんのか！」

「そんな怒んなよ」

つたく、最近の若者はキレやすいってのは本当だったみたいだな

……

「てか別になんだったっていいだろ、それこそお前には関係ねえし」

「それは……」

言い返された吉岡は言葉に詰まっていた。

「つーかそろそろやばそうだ。ギャラリーが増えてきてる」

いつの間にか周りに野次馬らしき奴らが数人集まってきていた。

放課後の下駄箱の前なんて人通りが多いところで騒いでれば当たり前

前か……

「あんま大事になるとお前も不味いんじゃないのか？」  
なにせこいつは野球部のエースらしいからな。ここで問題を起こせばこいつにとってもマイナスにしかならない。吉岡もそれを理解したらしく……

「チツ！ 俺はまだこの事に納得してねえからな！」

そう言っつて吉岡はどこかにいっつてしまった。

だから別に納得しなくていいから関わらないでほしいんだが……でもなんとかこの場は治まったな。はあ……ったく面倒くせえ。

「そついやお前、腕は平気か？」

「はい、大丈夫です。痛みありませんし」

「そうか。じゃあ俺らももう行くうぜ、なんか目立ってきてるし」

「そつですな……」

俺達はそのまま周りを気にしないようにしながら学校を出た。  
帰らせてえ……



## 十一話

俺達が学生警察に着いたのは学校が終わってから一時間が経っていた。

「やあ、遅かったじゃないか」

昨日と同じく所長室に通された俺達を待っていたのは、こちらも昨日と同じく偉そうな小さい所長が待っていた。

「なにかトラブルでもあったのかい？」

何気ない慧華の質問に逢いは申し訳なさそうに答えた。

「いえ、その……トラブルとかじゃなくてですね、えーとその、来る途中に夕霧先輩がトイレに行きたいと言い出して……」

「トイレ？」

予想外の答えだったのか慧華はわけがわからないといった感じで聞き返してきた。

「いや、あん時はマジでヤバかったわ。急に便意が襲ってきたのに加えて回りにコンビニとか公衆便所がないっていう最高に危険な状況でさあ。さすがに俺も『不味い！』と思って、こうなりやその辺でしちまうかっていう決断を下そうかと思ったら逢が近くの民家に掛け合ってくれて、まあ一命をとり遂げたっていう大冒険があったんだよ」

あと三分遅かったら確実に漏らしてたな。若干「コンニチハ」してたし……

「あ、それは……大変だったみたいだね……」

「はい……」

一番大変だったの俺だけだねっ！

.....。

「それでは夕霧くん、今日から仕事に入ってもらおう。今日やらなくてもらうのは街の見回りだ。といっても難しいことはなにもない。放課後になると学校から解放された学生たちが羽目を外し過ぎてしまうことなどがある。そういう人達を注意して回るのが今回の仕事だ」

「具体的にはどんなのだ？」

「そうだね……例えば公共の場で大人数でたむろしていたり騒いだりしている者、強引なナンパをしてる者、遅くまで遊んでいる者、あとは一昨日君が会ったような不良集団などもたまに出てくるのでそういった者の補導等だな」

うえ〜意外に多いな……

「それを俺達二人だけで見て回るのか？」

俺の問いに答えたのは慧華ではなく逢だった。

「いえ、二人で見て回るにはこの街は広すぎます。他の所員とエリアを分担して見て回るんです」

「なるほどね」

朝美市は東京都と埼玉県の境にある街をいくつか合併させた街だ。とてもじゃないが二人でなんて回れないだろう。

「本部のあるこの地区は四つのエリアに分担されています。他の地区にもそれぞれ学生警察の支部があり、地区ごとにエリアを分担して見回りをおこなっているんです。時々そっちの方にも臨時で行く場合もあります」

「学生警察ってここだけじゃなかったのか」

始めて知ったな、一年も住んでるのに……

「それで今日君たちに担当してもらうのはエリア2、朝美駅から南朝美駅方面の範囲だ。見回るルートは君たちで決めてくれ」

「わかりました」

「そういや他のエリアの担当の奴らはいないのか？」

「ここにいるのは俺と逢だけ。他のエリアの担当の奴らの姿はいない。」

「他の者はすでに見回りに行っているよ。本当は君の紹介もしたかったんだが……」

「先輩がトイレに行つてたせいで遅れたんじゃないですか……」

あゝそういやそうだったな。

てかその前に吉岡とのこともあったしな。

「まあ紹介は後日改めてするでしょう。それじゃあ二人とも、よろしく頼むよ」

「了解です」

「へい」

そういつて俺達は初仕事に向かった。あ、初は俺だけか……

「なあ、どの辺を見て回ればいいんだ？」

「そうですね……基本的には駅前やコンビニ、ゲームセンター等の娯楽施設。後は公園等人が多く集まる場所を見て、その後他の場所を見て回ります。見回りはこれの往復です」

「えっ？ 往復すんの？」

「はい。一度見た所でもその後問題が発生する場合もあるので、時間内はずっと往復です」

ちよっ 最高にダルいんですけど……

安請け合いするんじゃないな……

その後俺達は、朝美駅から南朝美周辺、その他を見て回り、そこを幾度も往復した。

特に問題らしい問題も起きず、正直俺は飽きていた。

「アアアアアアアアアアアアアア……」

「……………」

「アアアアアアアアアアアアアアアアアア……」

「……………」

「アッアアアアアアアアッゲホッゲホッ！ あー……………」  
むせちゃった……

「もう先輩！ さつきからあーあーあーあーうるさいですよー！」

「だってよう〜ひまなんだよう〜」

「なんですかその気持ち悪いしゃべり方……もう、ちゃんとやっってください」

そう言っただけはまた歩き出してしまった。そのあとを俺は足取り重くついていく。

冷たい奴だなあ。

「そろそろ休憩にしましょう」

何度目かの往復で再び朝見駅まで戻ってきたところで逢がそう言った。

「終わりじゃなくて休憩なのか……………」

かれこれ三時間以上歩き回っている。いい加減帰りたいんだが……

そんな俺の苦悩を知ってか知らずか 知ってても無視しただらうけど 休憩場所に向かっていた。

俺達が向かったのは駅前のファーストフード店（ハンバーガー）だ。

俺はハンバーガーとチーズバーガーとテリヤキバーガーにアップルパイとドリンクにコーラを頼んだ。因みに逢はチーズバーガーのセットを頼のんでいた。

二人で店の奥のボックス席に座り、俺はすぐに包みを開けて食べる出した。

「先輩頼みすぎじゃないですか……」

「そりゃこんだけ歩き回れば腹も空くに決まってるんだろ」

「それはそうですね……でもそんなにカロリーの高いもの食べるのと太りますよ？」

「大丈夫大丈夫、俺太りにく体质だから」

そう言った俺に逢はジトつとした目を向けてきた。

「……先輩は女性の敵ですね」

「はあ？」

「女の子は色々努力してるってことです」

努力、ねえ……そっぴや前に千里もダイエットとか言っって一時期野菜ばっか食ってた時期があったな。

「じゃあお前もダイエットとかしてるの？」

「私は食が細い方なのであまりそっぴやのはしませんけど、それでも気を抜いて甘いもの等を食べるとやっぱりちよつと……」

「ふうん。そんなもんか……俺には理解できないな」

「それは先輩がそっぴやという体質で、しかも男だからじゃないですか？」

「まあそれもあるけどな……俺は食べれるときに食べなきゃいけないって意識が強いんだよ。じいさんの修行で山に入れられた時は食料は自分で確保しなくちゃならなかったからな。いつも食べ物があるとは限らない。それこそ何日も食べるものが無い時だってあった。そういつた経験があるから、普通の人とは考え方が違うのかも知れないな」

それを聞いていた逢はどう答えていいのか解らないといった顔をしていた。

まあ日本で普通に暮らしてればそんな経験ないから当たり前前かもしれないが。

「先輩は……」

「ああ？」

逢が若干の時間を置いてから言葉を発した。

「先輩はどうしてそこまでして武術を習おうと思ったんですか？」  
急な話題転換に俺は一瞬焦ったが、なんとか顔に出さずにすんだ。逢からしてみれば普通に疑問に思っただけか聞いてきただけかも知れないが、俺にとってそれはあまり語りたくないことだった。

「別に深い理由なんてねえよ」

俺はなるべくいつも通りの口調で答えた。

「ただその頃、なんとなく強くなりたかっただけだよ。男の子は強いヒーローに憧れるもんだろ？」

俺の言葉に逢は納得はしてないものの、それ以上追及はしてこなかった。

そのかわり……

「ふふ、先輩がヒーローですか？ 全然似合いませんね」  
そう言って馬鹿にしたように笑った。

「どっからどう見てもヒーローって感じじゃねえか」

「ヒーローはヒーローでもダークヒーローにならなれそうですね」

「お前結構言うねえ……」

そんな下らない会話をしてる間に結構時間が経ってたらしい。

「先輩、そろそろ休憩終わりですよ。見回りの続きに行きましょう」

「あゝまた延々と歩き回るのか……」

「ほら、文句言ってるさっさと行きますよ」

俺は逢に背中を押されながら店の外に出た。

外はもうすっかり夜の帳が降りていた……。

あの後俺達は、また同じように見回りを続けた。

現在午後九時過ぎ。

逢いわく、この時間帯が一番重要らしい。遅くまで出歩いている学生を注意して回るのは勿論、柄のよくない連中が活発になるのもこの時間らしい。

確かに俺が遭遇したのもこのくらいの時間だった。

だが幸い、今日はそういった奴らの姿は見かけず、俺達は遅くまで遊んでいる学生に注意するだけで終わった。

学生警察ガードに戻ってきたのは十時半を回った頃だった。

「あゝつかれたあゝ」

学生警察ガードの入り口にある待ち合い用の椅子に座り俺はそう口にし

た。

肉体的にはそんなに疲れてはいなかったがなんとなくそう言ってきたかった。

仕事をした後はその日の活動報告をしなくてはならないらしいが、それはすでに報告済みだ（逢が）。

「お疲れ様です先輩」

報告を終えて戻ってきた逢がそう言っただけで冷えた缶のお茶を差し出してきた。

「悪いな」

差し出された缶を受け取り、プルタブを開けた一口飲んだ。

逢も俺の隣に座り同じようにお茶を飲んでいた。

一息ついたところで逢が話しかけてきた。

「今日は何事もなくて良かったですね」

「ん？ああ、まあな」

結局殆ど街を歩き回っただけになっちまったけど。

「でも無きや無いでそれはまた暇だったな」

「街が平和なのは良いことだとじゃないですか」

「まあな……」

でもこれだったら俺、要らないと思うんだが。

「それでも毎日が今日みたいに平和なわけじゃないですからね」

「そりゃそうさ。人と人が共に生きていくなかでは色んな感情が混じり合うからな。そこには必ずしも良心や好意だけがあるわけじゃない。同じように怒りや悲しみ、恨みや妬みといった悪意も存在する。そんな感情を持つ人間が大勢集まれば、やっぱりそこには色んな問題が起きるんだろうさ」



俺は特に変なことを言っただつもりはなかったのだが、話を聞いていた逢は驚いた顔をして目を瞬しばたかせていた。

「なんだよ」

「先輩が難しいことを言ってるのが意外で……」

……………。

「……お前俺のこと馬鹿にし過ぎ」

「いえそんなつもりじゃ　！」

「はあ……別にいいけどな」

そんな話をしてしていると入口の自動扉が開いた。

入ってきたのは知らない短髪の男子学生だった。

だが逢の方はその男を知っているらしく、立ち上がって挨拶していた。

「お疲れ様です大迫さん」

「おお石動か〜お疲れさん！」

いつも通りの平坦な逢に対し、こちらはやけにフランクな対応だった。

とそこで、大迫と呼ばれた奴が逢の隣で座っている俺に気づいた。

「あれ？　もしかしてそいつが新しく入った奴？」

「あ、そうです。先輩、こちらは学生警察ガードと一緒に働いている大迫おおの

真治こしんじさんです。大迫さん、こっちが新しく入った夕霧慶介先輩です」

逢の紹介を受けた真治は俺の前までやってきた。

「大迫真治だよろしく頼むぜ」

そう言っって右手を差し出してきた。

「ああ、こつちこそ」

俺も立ち上がり真治と握手を交わした。

「慶介だっけ？ この間の不良倒したのってお前なんだろう？ なかなかやるじゃねえか」

「あれはたまたまだ」

「またまた謙遜しちゃって。一応俺は荒事担当なんだ。喧嘩には自身がある、是非一度手合わせ願いたいな」

そう言われて改めて真治を見ると、確かに大柄ではないが引き締まった体つきをされていて、動きにも目立つ隙は見当たらない。多分何か格闘技をやっているんだろう。

「遠慮しとく。痛いのは御免だ」

そう言って俺は肩を竦めてみせた。

「はは、まあ仲良くしようぜ」

真治の方も特に気を悪くしたふうもなく、快活に笑った。

「そっいや今日はなんか事件あったか？」

「俺達方は特に無いな。そっちは」

真治も今日は見回りで、俺達とは別のエリア1、丁度俺達とは逆の朝美駅から北のエリアだったらしい。

「俺の方は、路上で喧嘩してる学生を止めに入ったのが一件あるくらいだ。それも特に大事ってわけじゃなかったしな」

喧嘩の仲裁か。そんなのも学生ガード警察の仕事なのか。

「んじゃ俺はそろそろ事務に今日の報告してくるわ。またな二人とも」

「ああ」

「お疲れ様でした」

そう言っつて真治は中に行つてしまつた。

悪い奴じゃなかつたな。まあちよつと好戦的ではあつたが。

真治もいなくなり、ロビーにはまた俺たち二人にだけになつた。

「……俺達も帰るか」

「そうですね」

その言葉を交わし俺達は帰路についた。

## 十二話

次の日。現在午前七時である。なんでこんな朝早くに起きてるかって？

そんなのこいつに聞いてくれ！

「なに、なんなの！？　なんか俺に恨みでもあるわけ？」  
俺は玄関先に立つ逢に向かつて想いのたけをぶつけていた。

「てか昨日よりはええし！　たださえ昨日は早かったのに、今日は更に三十分も早いんですけど！　なにお前、もしかして「早起きは三文の徳」とかマジで信じてんの？　あんなの迷信ですから！　早起きしたところで徳とかねえから！　もしたとえそれが本当だとしても三文とか現在の貨幣価値で80円分にしかないから！　80円（笑）てなんだよ、パンも買えねえよ！　朝飯にすらならねえよー！」

俺は息切れを起こしながら、それでも言いたいことを全て伝えきった。

この俺の熱い思いを受けとった逢は果たしてどんな返答をするのか……

「上がっていいですか？」

「……………」

「……………」

「……………ぶいぞ」

……………。

「それで？ 結局お前何しにきたわけ？」

俺は不機嫌さを隠すことなく、改めて逢に質問した。どうせまた遅刻がどうか言う話だろう。

そう思っていたが、逢の返答は全くの予想外なものだった。

「今日は朝食を作りにきました」

……………はい？ 朝食？

「なんでまた急に？」

「昨日は先輩、朝食を食べていかなかったの。だから今日はしっかり食べていってもらおうと思ひまして。朝食は大事ですからね」  
確かに昨日は食う時間無かったけど。

「あとついでのなので私の分もここで作って食べてしまおうと思って。どうせならまとめて作った方が早いので」

こいつ何気にちゃっかりしてるな……………。

でも作ってくれると言うなら喜んで頂こう。あえて拒否する理由も無いしな。

「あゝまあ、そういうことならよろしく頼む」

「わかりました。では私は朝食の準備をするので先輩はその間に支度を済ませてください」

そう言っただけはキッチンへ行き、持っていた手提げ袋からエプロンと材料を取りだして準備を始めた。少し様子を見ていたがなかなか手慣れているようなので、これなら変なものも出てこないだろう。その姿を見て後は任せても大丈夫だろうと思ひ、俺は自分の準備を始めた。

俺が支度を終えるのと逢の料理が完成したのはほぼ同時だった。机の上には逢が作った料理が並んでいる。白米（これは昨日炊いてあったもの）、ベーコンエッグ、わかめと豆腐の味噌汁、ほうれん草の和え物、レタスとトマトのサラダ、そしてデザートにヨーグルトが置いてある。

朝食としては十分に豪華だ。

「簡単なものしか作れませんでしたか……」

「いやいや充分。この街に来てからこんな朝食食ったことねえよ」

朝はいつもコンビニのパンとかだからな。

「因みに俺には主人公習性（不味いものを美味しいと言って食べたりするアレ）は入ってないからな。感想は正直に言っぞ」

「なんでそこで偉そうなんですか。でも多分味の方も大丈夫だと思いますよ。味見はしましたから」

逢は自信を持ってそう言ってきた。

まあぶつちやけ俺は大抵のもんは食えるけどな。俺が山で食ったのなんか世間一般からすれば下手物の部類に入るもんばっかだからな。

「じゃあ早速頂くか」

俺は机に並べられた朝食に手をつけた。

自信満々に言っていた逢ではあるが、それでもどこか緊張した感じが漂ってる。

そんな中、俺は一口目を食べた……

「……どう、ですか？」

そう聞いてきた逢に俺は……

「……………美味い」

「えっ？」

「普通に美味いよこれ！」

そう言っただけは次々に食べていった。

ベーコンエッグは固すぎず柔らかすぎず、しかも黄身の部分は半熟で俺好み。味噌汁も薄すぎず濃すぎずの絶妙なもの。ほうれん草の和え物には梅干しが入っていて今まで食べたことのない味。サラダも特製のドレッシングがかかっているらしくサッパリしていても美味い。

「いやマジで美味いなこれ！」

「そうですか、喜んでもらえてよかったです」

俺はそう嬉しそうに言っただけ、自分の分の朝食を食べ始めた。

朝起こされたのはアレだったが、こんな美味しいものを食べれたんなら起こされるのも悪くないな。三文以上の徳をした気分だ。

## 十三話

朝食を食べた後、一息ついてから俺たちは（余裕をもって）家を出た。

通学中は昨日と変わらず好奇の視線があつたが昨日程ではなかつた。その分嫉妬の視線が増えたが……。

まあ気にしてもしょうがないので無視して進むことにした。

途中、昨日と同じように大和……となぜか千里までがやってきた。何気なく理由を聞いたところ……「別にいいでしょ」とのことでした。

千里の家はここからはそこそこ離れている。わざわざこつちまで来ると逆に遠回りな気もするが、本人が別にいいと言っているので俺も特に追及はしなかつた。

その後俺達は四人で学校へ行き、昇降口で逢と別れ、自分達の教室に向かった。

ホームルームまで時間があるので三人で雑談を交わし、担任教師が教室に入ってきたところでお開きになった。

退屈な授業を話し半分で聞き流し、時折窓から外の風景をぼんやりと眺ていた。

そのまま最近の自分について少し考える。

学生警察ガードに入り、俺の力を人を護るために使ってほしいと言われたこと。その事について。

確かに俺が強さを求めた最初の理由は、大事な人を護りたいと思つたからだつた。

だが俺の手に入れた力は、本当に護るための力なのだろうか？



俺自身、人を護るような人間なのか？

答えは否だろう。

二年前のあの日。俺は自分の中の黒い感情に気づいた。

いや、それは黒では無いかもしれない。人を殴り、蹴り、蹂躪することに快楽を感じるわけではないのだ。

むしろ何も感じない。そう……感じないのだ。

そこにあつたのは『無』だ。

あの時、人に暴力ちからを行使している間、何も感じず、何も考えず、ただただ人を痛めつけていた。

すべてが終わった後、返り血で紅く染まった俺を見て誰かが言った。

「悪魔だ……」と。

その場にいた観客の中に、争いの発端になった女の子がいた。

彼女は俺を見て泣いていた。

それはこの場の状況に恐怖したのか、あるいは俺自身に恐怖したのかはわからない。

でもその時俺は思った。

俺の力は護る為の力じゃないのだと……

「ククッ……」

そんな俺に街を護れ？ とんだお笑い種<sup>ぐさ</sup>だ。  
俺は思わず自重の笑みを漏らした。

「夕霧！ お前は授業中になにをニヤニヤしてるんだ。笑ってる暇があるなら前に出てこの問題を解け」

笑っているところを数学教師に目敏く発見された。

おい、いまそういうシーンじゃねえから！ 結構シリアスな場面だから！

などと言える訳もなく、俺は仕方なく席をたった。

クスクスと笑うクラスメイトの間を進んで黒板の前に行った。そして俺は問題を前にして悩んだ。

(まったくわかんねえ……)

俺には問題の意味が全く解らなかった。

「これまだ習ってなくね？」

「……今さっきやったばかりだろう」

「……ばんなそかな」

俺が授業を聞いてなかった間に随分進んだみたいだ。

「はぁ……もういい、席に戻れ……」

呆れた教師に言われ、俺は自分の席へ戻った。

自分の席につく際、さっきまでの続きで、ふとあることを思い出した。

つい最近、俺に「ありがとう」と言った少女のことを……

## 十四話

午後の授業も終わり、放課後になった。

何事も無く学校が終わり………いや、何事も無くは無かったな。休み時間などに廊下を歩く度に吉岡を始め、幾人かの男子生徒に敵意がこもった視線を向けられたり、舌打ちされたりした。

恐らく、逢に少なからず好意を寄せている奴らだろう。

特に実質的な危害を加えられたわけではないが、正直ウザい。

だがいちいち相手にするのも面倒だ。まあほっときゃその内おさまるだろ。

俺はそう前向きに思うことにした。

校門の前に行くと、すでに逢の姿があった。今日は昨日と違いスムーズに合流することができた。

だが会っていきなり逢に確認をとられた。

「先輩、忘れ物は？」

「ない」

「トイレは？」

「済ませた」

「では行きましょう」

昨日の事があるので今日は絶対に遅刻しまいと思っているのだから。

遠足の日<sup>ガード</sup>に家を出る前の小学生に聞くような確認をされてから俺達は学生警察に向かった。

逢が心配するような事態は起きず、俺達は遅刻せずに学生警察に

着いた。

ついですぐに俺達は会議室のような場所に行かされた。

部屋を覗くと、そこには慧華と真治の姿が見えた。そして二人の他にも十数人の人間がこの部屋に集まっていた。

部屋を覗いていると俺達が来たのに慧華が気づいた。

「今日は遅刻せずに来たようだね」

そう言っつて慧華が近づいてきた。

「まあな」

「お疲れ様です所長」

それぞれ言葉を交わした所で俺は慧華に質問した。

「それで？　なんだっつてこんな所に集まっつてんだ？」

しかもこんなに大人数。いまから何かやるのか？

「実はこれから、昨日できなかった君の紹介をしようと思っつてね」  
あゝそっついやそんな話もあつたな。俺達が遅刻してできなかったんだっけな。

慧華に促されるまま、俺達は皆の集まる場所に連れていかれた。

「よう、昨日ぶり」

「ああ」

皆の前に来たところで、ほとんどが初対面の中で唯一俺のことを知っつている真治が真っ先に話しかけてきた。

「君達は知り合いだっつたのかい？」

俺と真治のやり取りをみて慧華が少し驚いたように聞っつてきた。

「昨日報告に来たときに偶々ここで会っつたんすよ」

真治の答えに「そうだったのか」と納得して、慧華は改めて皆に  
向き直り、俺の紹介を始めた。

「知っている者も要るかも知れないが、彼が新しくこの学生警察に  
入ることになった夕霧慶介君だ。これから君達と一緒に働いてもら  
うこともあるかと思う。そのときは色々教えてやってくれ」

そう言っつて慧華が続きを俺に促そうとしたときに所員の一人が「  
待った」をかけた。

「なんだい山寺君？」

「失礼ですが所長、本当に彼に学生警察の仕事が勤まるんですか？」  
そう言っつて慧華に質問をしたのは、見るからに生真面目そうな感  
じの男だった。

着ている制服は、確か朝美市内でも上位の学力を誇る名門高のも  
のだ。

そんな奴も学生警察で働いてるのかと俺が感心している間も話は  
進んでいた。

「僕にはどうもそうは思えないのですが？」

山寺と呼ばれた男はチラリと俺の方をみて小馬鹿にしたようにそ  
う言っつた。

なんだこいつ失礼な奴だな。

「君の心配もわかるが、私は彼なら大丈夫だと思っている」

そう言っつて慧華は何ら根拠の無い信頼をよせてきた。

だがそんな言葉では納得できないといった感じの山寺は、とても  
面倒臭いことを言っつてきた。

「でしたら所長。彼と少し手合わせしてみてもいいですか？　せめ  
て彼がどの程度できるのかを確かめてみたい」

それに対して慧華は

「ふむ、まだ少し時間はあるか……よし、いいだろう、面白そうだから許可する」

俺に確認もなく勝手に許可をだした。

「おい、勝手に決めんなよ」

しかも面白そうて……やる本人からしてみたら全然面白くねえよ。

「まあそういうな。彼は少し真面目すぎるところがあつてね。試験も無しにいきなり入ってきた君に納得できないものがあるんだろう」「別に俺としてはここに入らなくてもいいんだけどな……」  
入りたくて入ったわけじゃねえし。

「それは困るね、私は君に期待してるんだから」

慧華は笑いながらそう言った。

「それに、君がいなくなると寂しがつてしまいそうな子もいるしね」  
そう言つて慧華は意味深な笑みを浮かべて逢を見た。

「？ なんですか？」

話に参加していなかった逢は、突然向けられた視線に意味がわからないといった表情を返した。

俺達は学生警察内にあるトレーニングルームに移動した。

部屋には様々なトレーニング器具があり、部屋の中央には試合用のスペースまである。まるで何処かのスポーツジムみたいだ。

「なんだってこんなことしなきゃなんねえんだよ……」  
俺はフェイスガードを付けながら不満を漏らした。

「気をつけてください。山寺さんは学生警察内でも相当の実力者です。なんでも柔道、空手、剣道の経験者らしいです」

確かに見た目にもひ弱そうという感じではなかったが、まさかあいつも格闘技経験者だったのか。

頭も良くて、おまけに格闘技もやってるとか何もんだよ。

「彼はとある資産家の息子でね、護身術の一環として格闘技を習わされてみたいだよ」

俺の心の疑問に答えたのは慧華だった。

「中でも柔道の腕は相当のものだ。中学生の頃住んでいた県の大会で準優勝をしているほどにね」

「そいつは凄いな」

そしてそんな奴の相手をするのはやっぱり面倒臭い……

「先輩、本当に気をつけてくださいね……」

心配そうに見てくる逢に俺は笑いながら言った。

「そんな心配すんな、適当にやられて戻ってくるから」

「……やられるのは前提なんですね」

逢の心配が呆れに変わったところで慧華からお呼びがかかった。



## 十五話

「それではこれから模擬戦を始める。ルールは先に相手を地面に倒した方を勝者とする。尚武器の使用、及び倒れた相手への過剰な追撃は禁止とする」

俺達が頷くのをみて、慧華は離れた。

「悪いが僕は手加減しないぞ。お前みたいなどこの誰とも知れない奴を学生警察で働かせたくはないからな」

回りに人がいなくなつたところで山寺がそう言ってきた。

奴さんめいしんヤル気満々すよ……

俺が返事に迷っているうちに試合開始の合図がかかった。

「ふっ！」

開始直後に山寺から先制攻撃があつた。

顔面に向けての素早い突き。俺は慌てそれを避け……たと思つたら今度は左からの上段蹴り。俺はそれを右腕と左腕を交差させる感じで受け止めた。

「っ！ ってーなあ、ちよつとは手加減してくれよ……」

俺はすでに距離をとっている山寺に愚痴を漏らした。

「はっ ! ふんっ！」

だが俺の言葉にお構い無しに山寺は次々と攻撃を仕掛けてくる。

俺はそれをギリギリでかわし続けた……

「本当に彼は面白いな」

私は試合を見ながらつい言葉を漏らした。

「所長にもわかるんすか？」

私の右隣で一緒に観戦していた大迫君が私の言葉に反応した。

「ああ。でも私達以外、何人が『あれ』に気づいているんだろうね」  
少なくとも私の左で心配そうに彼の試合を見つめている少女は気づいてないだろう。

「こんなことなら俺がやればよかったすよ。俺もあいつと戦ってみたい……」

そう言って大迫君は悔しそうにしながら試合を観ていた。

さてこの試合、決着はどうなるか……

「いつまで避けてるつもりだ？ 少しは反撃してみせろ」

そう言いながら、なおも攻撃の手を弛めずに山寺は攻めてきた。

時々カウンターを狙ってみるもの、それを察知してかその都度距離をとられた。

「そろそろ終わりにしよう」

そう言ったかと思うと山寺はさっきよりも手数も多く出してきた。俺はなんとかそれをかわしていたが、ついにかわしきれなくなり、相手の左からの攻撃を右腕で弾いた。

だがそのせいでがら空きになった俺の胸元を、山寺の右手が掴んだ。

そしてそのまま体を滑り込ませ、俺は意図も簡単に投げられた。

「うおっ！」

一瞬体が浮いたかと思うと、次の瞬間には俺は地面に叩きつけられていた。

「勝負ありっ！ 勝者、山寺貴司！」

審判の声を聞き、観ていた観客は一斉に声を上げた。

勝ち誇った顔で倒れている俺を一瞥して舞台から去っていく山寺。それと入れ違いに、逢が俺の側に駆け寄ってきた。

「大丈夫ですか先輩！？」

「まあなんとかな。ちゃんと受け身とったし」

心配そうな逢に俺は笑ってそう答えた。

「負けちゃいましたね……」

「そうだな。まあこれで学生警察に入れなかったら、それはそれでいいんだけどな……ん？ でもそうすつとお前これから一人でやることになるのか？」

「……別に私はもともと一人でやってたので先輩がいなくても問題ないですよ……」

俺の言葉に、逢は不機嫌そうな、それでいて少し寂しそうにそう言った。

「あつ、でもこれでお前の朝飯が食えなくなるのは惜しいな。お前の飯美味かったし」

おどけたようにそう言った俺に対して、逢は顔を横に反らしながら、

「……別に朝食位作りに行つてあげますよ」

紅くなってる顔を隠すように、反らした顔を俯けてそう言った。

「それに朝もちゃんと起こしに行つてあげます。家も近いし、どうせ同じ学校なんですから。先輩はほっとくとすぐ遅刻しそうですし…」

すぐに逢は紅くなっているのを誤魔化すようにそう付け加えた。

「はは、そいつはありがてえな。できれば起こしに来る時間をもう少し遅くしてもらえともっと有り難いが」

紅くなってるのに気づかない振りをして、俺は冗談ばくそう答えた。

試合を終えた山寺君はそのまま私の所にきた。

「所長、やはり彼は使えないですよ。僕に一撃も与えることができなかった。それどころか殆ど防戦一方だ」

彼は呆れたように私にそう言った。

「これじゃあいざつてときに何もできないでやられてしまうのが落ちですよ」

肩を竦めて笑っている山寺君に対し、言葉を返したのは私ではなかった。

「お前、本当にそう思ってるのか……?」

「真治、お前も観てただろう? 彼は僕の攻撃をかわすだけで、殆ど反撃もできなかったんだぞ?」

諭すように言った山寺君に対し、大迫君は真面目な口調で言った。

「そこだよ、そこ。あいつはお前の攻撃を殆どかわしてたんだぞ？  
防ぐんじゃなくかわす……一体どんだけの動体視力だよ。それに  
防いでたのだから最小限かわしきれなかった攻撃だけだ」

「だからなんだって言うんだ？ 偶々動体視力が良くて、僕の攻撃  
をかわせていただけじゃないか。結果的には僕に投げられて負けた  
じゃないか」

そう苛立ったように言った山寺君に対して、大迫君が決定的なこ  
とを口にするのを、私は黙って聞いていた。

「お前は気づいてないかもしれないが、あいつは試合が始まってか  
らお前に投げられるまで、その場を一步も動いて無かったんだぞ？」

「！？」

それを聞いて、流石に山寺君も驚きで言葉を発せなかった。

そう、彼は試合が始まってからずっと、その場を動かずに山寺君  
の攻撃をかわしていたのだ。

「これでもまだ彼が入るのに反対か？」

私の問いに山寺君は何も答えなかった。ただ振り向いて、さっき  
まで自分と戦っていた男を見つめていた。

私もそれ以上は何も言わず、同じように彼がいる方を見た。

そこには冗談を言って逢君に怒られている男がいた……

## 十六話

逢を軽くからかった後、俺は慧華のもとへ向かった。

結局俺がどうなるかを聞きに、だ。

慧華のもとへ行くと、そこには真治と先ほど俺と勝負していた山寺もいた。

山寺は何か言いたそうな顔をしていたが結局何も言ってこなかった。

そんな山寺を真治がニヤニヤと笑って見ていた。

二人の様子を少し疑問に思ったが俺は無視して慧華に話しかけた。

「そんで？ 結局俺はどうなったんだ？ 入ると言う話が無くなったのなら俺は有難く帰らせてもらうが？」

俺の言葉に逢がまた不満そうな顔をしていたが気にしないことにした。

「そのことだがな、どうやら山寺君も君の学生警察入りを了承してくれたようだよ」

「えっ？」

驚いて声を出したのは俺ではなく逢だった。

俺は特に反応せず、質問だけを返したの。

「どういうことだ？ 俺は勝負には負けたはずだが？」

「もともとこの勝負は勝ち負けではなく君の技量を確かめるためのものだ。君の技量が高ければたとえ負けたとしてもそれは問題ではない」

「俺は一方的に負けたとしか思えなかったが……」

「それでも山寺君が君の技量を認めたのだから問題ないだろう？」

俺は山寺の方へ顔を向けた。

「ふん。別に僕は君を認めたくわけじゃない。それでも僕の攻撃をあそこまで防げたことは少しばかり評価に値する」

山寺は不機嫌そうにそう言った。

全然褒められてる気がしないんだが……

「まあ何にせよよかったじゃねえか！　これでお前も正式に学生警察の一員だ！」

真治が嬉しそうにそう言ってバシバシと肩を叩いてきた。

いてえから……

「良かったですね先輩」

逢もそう言っただけで薄く微笑んできた。

「……良かったのかねえ」

俺はまだこの面倒臭い生活が続くのだなと思って溜め息をついた。

その後、改めて自己紹介終えた俺達は見回りに出ている。逢は俺の自己紹介がおきに召さなかつたらしく、グチグチと文句を垂れている。

「なんですかあの自己紹介は？　ふざけてるんですか？」

「いやいやどこがだよ、完璧だっただろ？」

「『俺だ、よろしく』のどこが完璧なんですか？　もっと他に言うことあるでしょう」

「言いたいことを簡潔にまとめたんだよ」

「まとめ過ぎです！　はあ……まあ今更先輩に言ったところでどう

しよつも無いのはわかってますけどね」  
逢は溜め息をつきながら失礼なことを言っていた。

「でも良かったですね。学生警察を辞めずに済んで」

「別に俺は辞めても良かったんだが……」

「またすぐそういう……でもどうして山寺さんは先輩が学生警察に入るのを認めたんですかね？先輩負けたのに……」

「さあな。大方慧華になんか言われたんじゃないかねえの？つかいちいち負けたことを盛り返すなよ、俺が傷ついたらどうするんだ」

「先輩がそんなので傷つくようには思えませんが」

最近俺に対して厳しくないか？最近って言っても会ったのはついこの間だが。

まあ本当のところ俺にも何でかはわからない。

手を抜いていたとはいえ負けたのは事実だからな。

まあ今更気にしたところでどうしようもないだろうけど。どっちにしる入ることになっちまったんだから。

そう思つと途端に足が重くなつた気がした。

「何してるんですか先輩？早くいきますよ」

「はあ……」

何度か往復していて気づくことがあった。

「なあ、今日ちよつと変じゃないか？」

「先輩はいつも変ですよ」

「俺じゃねえよ……。街の様子だよ街の。なんかやけに柄の悪い奴



が多くねえか？」

「……言われてみれば確かに……」

逢も回りの様子を見て納得したようだ。

「でも特に何か問題を起こしてるわけじゃないですし大丈夫じゃないですか？」

「まあそうなんだが……」

どうにも嫌な感じだ。

逢の言う通り特に問題を起こしてるわけじゃない。

だが街を歩くそいつらからはどこか殺気だった雰囲気が漂っている。何かを警戒しているような……

「気にしすぎですよ。ここ二、三日は特に大きな問題も起きてないですし、もし何かあれば私達学生警察がいます。問題ないですよ」  
そう言って逢はまた歩き出してしまった。

だが俺にはどうしても街の様子が気になってしまった。

## 十七話

色々あった自己紹介の日から三日目。今日は日曜日である。

普段だったら昼間でゴロゴロしている筈なのだが、今日は朝から逢に起こされ学生警察へと連行された。

日曜くらいゆっくりさせろっつーの。

文句を垂れつつ学生警察へと行き、午前中は逢と一緒に見回りではなく事務作業をさせられた。

と言つてもそんなことやったことも無いのでできるはずもなく、早々に邪魔者扱いされた俺は、慧華に言われ学生警察内の掃除をさせられた。

俺がやったのは主に倉庫整理とゴミ出し、後は力仕事全般。

何か良いように使われてる気がしたが「それ位しかできないだろ？」と言われれば反論のしようもなかった。

昼に休憩を挟み、また掃除を始め、午後四時になったところで前半のグループと交代で見回りに行くことになった。

そして現在。とある公園の木の下に俺と逢は立っている。

別にサボってる訳じゃないんだからねっ！

……いやホントにサボってるわけじゃなく、これにはちゃんとした事情がある。

見回りを始めて一時間程経った時に突然雨が降ってきたのだ。

多分夕立なのだろうがなかなか激しい雨で、俺達は直ぐに雨宿りしようと思いを戻したが回りには雨をしのげそうな建物はなく、仕方なく俺達は近くにあった公園に生えていたそこそこにでかい木の下に避難することにしたのだ。

「……雨止みませんね」

「そうだな」

ここに來てからかれこれ10分程経っているが雨は一向に止む気配がなかった。

「くしゅっ！」

不意に逢がくしゃみをした。

「寒いのか？」

逢の方を見ると微かに体が震えていた。

春とは言えこの時間はまだ肌寒い。それに加えて雨で服が濡れせいもあり体が冷えたのだろう。

「いえ大丈夫です」

逢はそう言たが、どう見ても強がりには見えなかった。

俺は自分の着ていた制服のブレザーを逢の肩にかけた。

「表面は濡れてるけど中までは届いてねえからそれ羽織ってる。多少は暖かいだろうから」

「い、いいですよ別に！ それにこれじゃあ先輩が寒いじゃないですか」

「いいから黙って着てる。俺はこの位の寒さだったら平気だから。」

じいさんに鍛えられてっからな」

そう言っつて俺は逢に無理やりブレザーを羽織らせた。

「……先輩っつて意外に強引ですね」

「その言葉だけ聞くとなんかエロいな」

「そう言っつ意味じゃありません！」

その後もからかってる俺に文句を言っていたが最後にぽつりと逢

が言った。

「……ありがとうございます」

そう言って逢はそっぽを向いてしまった。

「……どういたしまして」

そう返し、俺達はまた言葉少なく雨が止むのを待った。

その後、二十分程経ってようやく雨が止んだ。

正直、午前中の力仕事と雨に濡れた服のせいで俺はもう帰りたかった。

だがそう言った俺に対し逢は、

「駄目です。仕事なんですから最後までしつかりやり通さないと」  
そうすげなく断られ、俺は渋々最後まで見回りを続けることになった。

あんま張り切るとろくなことにならないんだけど……

## 十八話

月曜日の朝。俺は今日も玄関のチャイムの音で目を覚ました。例に漏れず逢が来たのだろう。

俺は体を起こしつつ、枕元に置いてあった携帯を手に取り時間を確かめた。

「……七時四十五分か、今日は来るの遅かったな」

最近朝食を作る時間を考慮して七時前後、それが無かったとしても三十分頃には家にきていたんだが……

まあ大方、寝坊でもしたのだろう。あいつにしては珍しいがそういう日もあるだろう。

俺はそう思いながら玄関まで行き、扉を開けた。

「……おはようございます、先輩」

「よう、今日は遅かったな。寝坊でもしたか？」

そう言った俺に対し、逢はどこかゆっくりとした調子で答えた。

「……いえ、寝坊はしなかったんですが、準備に、時間が掛かってしまっ……」

「なんかあったのか？」

どこか様子がおかしい逢に俺はそう聞いた。

「……何も、ないですよ。それより、早く準備、を……っ！」

「おいっ！」

逢は言い終わるよりも早く、膝をつくような感じで倒れてきた。

「おい大丈夫か？」

「……だい、じょうぶ……です」

俺は咄嗟に逢を受けとめ声をかけたが、逢は荒い息を吐きながら  
そう答えた。

とてもじゃないが大丈夫そうには見えない。

とそこで、俺はもしかと思いつ逢の額に触れてみた。

「……やっぱりな。大分熱があるぞ」

予想通り逢の額はかなり熱くなっていた。

「仕方ねえ……ちょっと我慢しろよ」

「あ……」

そう言つて、俺は逢の体を所謂お姫様抱っこで抱え上げた。

逢は一瞬声を出したものの、抵抗する元気も無いのかそのまま素  
直に抱えられていた。

このまま逢を家に連れて帰るのもあれなので、俺は逢を抱え自分  
のベッドに連れていきそこに寝かせた。

「そこで寝てる」

「……ですが、学校が……」

「こんな状態で行けるわけねえだろ。いいからお前はそこでおとな  
しくしてる」

そう言つて俺は逢に布団を被せてその場を離れた。

俺はリビングの前でこの後のことについて考えた

(とりあえずまずは薬を飲ませねえとな。つっても家うちには薬はねえ  
し……。仕方ねえ、買いにいুক……。)

そう思い、俺は財布を持って家を出た。

始めにコンビニ行ったがそこでは風邪薬を取り扱ってないと言われ、どうしようかと迷ったあげく、俺は開店準備をしていた薬局に行った。

「すまない、どうしても薬が要るんだ。悪いんだが今買わせてくれないか？」

俺が無理を承知で頼むと、店員は意外にもあっさりとそれを了承してくれた。

俺は店員に勧められた風邪薬とスポーツ飲料と冷却シート、それと丁度良いものがあつたのでそれも買い、店員に礼を言つて急いで店を後にした。

家に帰ると逢は荒い息を吐きながら横になつていた。それに随分と汗をかいているようだった。制服のままつても余り寝心地の良いものでは無いだろう。

「流石にこのままじゃ不味いか……」

そう思い、俺は一度キッチンへ行き、少し熱めのお湯とタオル、それと逢が着れそうな服を用意してから部屋に戻った。

「逢、起きてるか？ 悪いけどこれからお前の身体拭いてから着替えさせるからな？ 男の俺で悪いけど我慢してくれ」

逢は俺の声を聞いているのかいないのか分からないぼんやりした感じだったので、俺は返事を待たずにやることにした。

最初に上半身だけ脱がしていき、流石に下着を取るの是不味いかと思ひそのままにして身体を拭き始めた。

逢の身体は華奢で、肌の色も白く、とてもキレイだと思った。拭かれている間も逢はぼんやりしていて、自分が何をされているのか分かっていないようだった。

（流石に普通の状態だったら興奮してたかも知れないが、今はそんな状況じゃねえからな）

全くとは言わないが変な気を起こそうとは思わなかった。

上半身を拭き終わり、持ってきたＴシャツを着せたが、俺のものなのでやはり少し大きかったようだ。

その後少し苦戦しながらスカートを脱がし、同じ様に脚を拭いてからまたも苦戦しながらズボンを履かせた。

最後に顔を拭ぬぐってから俺は再びキッチンに戻り、薬などと一緒に買ったレトルトのお粥を作り、逢の元に持っていった。

「逢、いまから薬飲ますけどその前に少しでも胃に何か入れとかないと不味いから、ちょっとで良いからこれ食え」

そう言っただ逢の身体を片手で支えながら、もう片方でお粥を掬い、少し冷ましながら逢の口元まで運んだ。

「……………ん、はあ……………」

逢は時間を掛けて一口を飲み込み、また熱い息を吐いた。

「もう少し食べれるか？」

微かに頷くのをみて、俺はまたお粥を口元まで運んだ。

その後二口ほど食べた後になんとか薬を飲ませ、またベッドに寝かせてから額に冷却シートを貼ってやった。

そして薬が効いてきたのか、逢はそのままに眠りについた。



「……あ、れ？」

目を覚ました私はいつもと違う景色に軽い戸惑い覚えた。それになんだか身体が少し重い。

なんとか上半身を起こし辺りを見回してみた。あまり物がない、殺風景な部屋。

あるのは私が寝ていたベッド、それに小さい本棚と床の上に丸いテーブルが一つあるくらいだ。

そんな風に部屋を見回していると、突然部屋のドアがガチャリと音をたてて開いた。

「ん？ なんだ起きてたのか」

そう言っに入ってきたのはこの部屋とは違い最近ではよく見慣れた人物だった。

「……夕霧、先輩？」

「なんだ？ ボケてんのか？」

「いえ、そういうわけじゃ……」

ただ突然の出来事に少し戸惑ってしまったのだ。

「あの、ここは？」

「俺の部屋だよ。そういやこっちの部屋はきたことなかったか」

そう言いながら先輩は私の側までやって来て額に貼ってあったものをはがし、そのままに直に手を当ててきた。

「まだ少し熱いな……」

「あの、何で私はここに？」

「覚えてないのか？ お前朝家の玄関で倒れたんだよ」

言われ、私は微かにそんな記憶があるのを思い出した。

「医者に診てもらったわけじゃないから正確にはわからねえけど、

多分普通の風邪だろ。大方昨日の雨に濡れたのが原因だな」

そう言いながら、先輩は新しいシートを私の額に貼った。その冷たさがなんだかとても気持ちよかった。

「先輩、いま何時ですか？」

「あ？ えーとそろそろ三時になる頃だな」

「えっ？ あ、学校は……」

「今更もおせえだろ。つかそんな状態で行けるわけねえだろうが。まあ一日位サボっても問題ないだろ。ついでに慧華の奴にも連絡しといた。今日はゆっくり休めつてさ」

そう言われ、私は申し訳ない気持ちになった。自分の体調管理が出来てないせいでいろんな人に迷惑をかけてしまった。

そんな思いが顔に出ていたのか先輩は私の頭の手をおきながら言った。

「そんな顔すんなよ。誰だつてこういう時はある。それこそ無理してこられた方が迷惑だ。こういう時は誰かに頼ってもいいんだよ、誰も迷惑だなんて思わねえから」

けして優しい口調ではなかったけど、その言葉に含まれた優しさに気づき、私は少し心が軽くなったような気がした。

「分かったらもう少し寝てる、まだ治ったわけじゃねえんだから。」

それとも腹減つてんならなんか食うか？」

「いえ、大丈夫です。そういうえば先輩、学校は？」

「そんな状態のお前をほっとけるわけねえだろうが。そこまで薄情な人間じゃねえよ。……いやサボれてラッキーとか思っつてないよ？」

「先輩……」

ジト目で睨んではいたものの、それでも先輩が私の為に学校を休んでまで看病してくれていたことが私は少し嬉しかった。

「まあそういうことだからお前はもう少し休んでろ。なんかあったら連絡してくれ、お前の携帯は枕元に置いてあるから」  
そう言っって先輩は部屋を出ていってしまった。

先輩がいなくなつて一人になつた部屋を寂しく思いつつ、私は少し横になろうとしてあることに気づいた。

服が、着替えさせられてる……

「え、あれ、なんで？ ……あつ！」

そこで私は臆気ながらその時の記憶を思い出した。

先輩に服を脱がされ、身体を拭かれていたという記憶を……

「っ！」

思い出した瞬間、私は自分でも顔が真っ赤になつていくのが分かった。

（どつしよどつしよどつしよどつしよどつ！ 私、先輩に裸見られてっ！）

私は布団の中に潜つて軽くパニックになっていた。  
心臓がドクドクと脈打つてうるさいくらいだ。

（自分の体調管理ができてなかったせいとはいえ、これは流石に恥ずかすぎる！ 見られるだけならまだしも、その上先輩に身体を拭かれたなんて……）

思い出してるうちに熱が上がってきている気がする。多分気のせいではないだろう。

（あれ？ でもさっき先輩は全然普通にしてたよね？ それなのに

あの反応……私の身体ってそんなに魅力無かったのかなあ……）  
裸を見られたという動揺と熱のせいもあって、だんだんと自分が何を考えてるのか分からなくなってきていた。

（先輩のばか！ どうしてこんなことしたの……！）  
善意でやってきてくれたとはいえ、それを理性的に受けとめるには私はまだ幼かった。

感情がうまくコントロールできない。自分からこんなにも感情が溢れてくるというのも動揺の一端になっていた。

（もうどんな顔して先輩に会えばいいのかわかんない……）  
でも先輩は、私の裸を見たのに全然そんな素振りを見せていなかったのを思い出し、今度は少し悲しい気持ちになった。  
心臓がさつきとは違う感じで苦しくなった。

（はあ、熱が出てるのに色々考えすぎたせいかな。とりあえず少し休もう……）  
そう思い、寝やすい感じに体勢を整えた。  
そこである匂いに気づいた。

（この匂い、なんか落ち着くなあ。でもなんの匂いだろう？ なんか最近嗅いだことがある気がする……）  
眠ろうとしていた思考を動かし、思い出してみた。

（……そうだ、これ、先輩の匂いだ……）  
最近、私の近くに要るのが当たり前みたいになっていた先輩の匂い。

男の人の匂いだけど、不思議と嫌じゃない。なんだかほっとする、そんな匂い。

その匂いを嗅いでいると、また私の心臓がドキドキと脈打った。

(でも、この感じは嫌じゃない)  
そう思い、心臓の音を子守唄に私はまた眠りについた。

俺は部屋のドアをノックしてから声をかけた。

「入るぞー」

自分の部屋なのに声をかけるというのも変だが、今は逢が寝ているということもあり一応声をかけてから部屋に入った。

「せ、先輩!？」

逢は既に起きていて、俺が部屋に入ると少し戸惑ったような声を出した。

「なんだ？　なんか不味かったか？」

「い、いえ……大丈夫です……」

どこか様子がおかしいと思い、俺は逢の姿を少し不躰に眺めてみた。

すると逢の顔が紅くなっているのに気づいた。

「お前顔が紅いぞ、もしかしてまた熱が上がったんじゃないのか？  
そう言いながら俺は逢に近づいていった。

「だ、大丈夫です！　問題ないです！」

「いいから少しじっとしてろ」

やけに拒む逢の言葉を遮り、俺はシーツの貼ってある額ではなく、

かわりに頬から首筋の部分に手を当ててみた。

「っ！」

「……やっぱり少し熱いな」

自分の体温と比べても逢の体温が高いのが分かった。それにさつきより逢の顔が紅い気がする。

「もう少し寝てろ、いま新しいシートと冷たい飲み物持ってくるか」

「ち、違つんですー！」

俺の言葉を遮るようにして、逢は大声ではないが強めの口調で言った。

「はあ……何が違つんだよ。現にお前、顔も紅いし熱だつてあるじやねえか」

「それは……そんなんですけど……」

呆れるように言った俺に対し、罰が悪そうに一瞬顔を伏した逢は、直ぐにキツと顔を上げて睨むような視線を向けて言ってきた。

「も、もとはと言えば先輩のせいですっ！」

「……は？」

いきなりの逢の発言に、俺はわけがわからずそう返した。

「先輩が変なことするから、だから……！」

「いやいや変なことってなんだよ、俺がなんかしたつてののかよ」

「しましたっ！先輩は私の裸を見ました！」

「……は？」

一瞬言葉の意味が理解できず、俺は思わずさつきと同じような返

しをしてしまった。そして言葉の意味を理解した俺は、

「……ああ」

「『ああ』じゃないですよ！」

……

「先輩は本当にデリカシーがないですね」

「いやそれについては悪かったよ」

あの後逢に話を聞き、俺は逢の様子が変わった理由を知った。

要するに、逢は裸を見られた俺にどう対応していいのか分からなくなっていた、なのにそれを気にしたふうもなく俺が接してきたのが原因だったようだ。

「でも別に疚しい気持ちがあつたわけじゃねえぞ？」

「いやまあ肌綺麗だなとか、なんかいい匂いするなとか思わなくもなかったけど……」

「先輩に悪気が無かったのは分かってます。私の為をやってくれたというのも十分理解してます。だから別にもう怒ってません」

「……そうか」

そのわりにいまだに態度が厳しいのは何故なんだろう。

「だから先輩はもう少し気遣いを持ってください。私だって、その、女なんですから……」

そう言った逢が、いつもと違いやけに年相応の少女に見え、俺は思わず笑ってしまった。

「なに笑ってるんですか？　ちゃんと反省してください」

「ああ、悪かったよ。ちゃんと反省するって」

言いつつも笑っている俺に、逢はとでも不満そうだった。

「そついや当初の目的を忘れてた」

予想外の出来事に俺は本来の目的をすっかり忘れていた。

「そついえば何か用があつてきたんですよね？　なんの用だったんですか？」

「ああ、そろそろ飯にしようと思つてたんだけど、お前食えそうか？　一応うどんにするつもりだけど」

病人ということもあり一応ごはんものは控えておいた。

「はい、大丈夫です。というか先輩が作るんですか？」

「当たり前だろ。いまこの家には俺とお前しかいないんだから」

加えて逢は病人。となれば作るのは必然的に俺しかないだろうが。

「先輩、料理できるんですか……？」

若干不安の混じった声で逢が聞いてきた。

「多少わな。これでも一年以上独り暮らししてるし」

「いつも出来合いの物ばかり食べてる気がしますが……」

まあ実際作るのは面倒だしな。それに最近の出来合いものはなかなか旨いし。

だけど……

「安心しろ。さっきお前が寝てる間に本屋に行って料理本買って読



んでたから問題ない」

「それを聞いて激しく不安になったんですが……」

終いには自分が作ると言いだした逢を説き伏せ、俺は調理の支度に入った。

「出来たぞ」

二十分程で出来上がったうどんを持って俺は部屋に入った。

「さあ食べ、遠慮はいらん」

そう言っとうどんの乗ったお盆を渡し、逢が食べるのを待った。

「……見た目は……普通ですな」

逢は若干安堵しながら、それでも緊張を残しつつ箸を持った。

「変に凝ったものじゃなく、なるべくシンプルにしてみた」

料理本があるとはいえ、いきなり凝ったものを作るのもあれだしな。

「それじゃあ、いただきます……」

逢は緊張しながら最初の一口を食べた。

「……どうだ」

自信はあるとはいえ、やはり他人の評価は気になる。

俺は思わず急かすような感じで聞いてしまった。

「……おいしい」

一口目を飲み込んだところで逢は口を開いて言った。

「そうか！」

俺は柄にもなく喜びを全面に出してしまった。

「本当においしいです。シンプルな分味の良し悪しがはっきりしますが、これは本当においしいですよ」

料理の上手い逢がそう言うのなら本当においしいかったのだろう。俺は嬉しくなって逢にどんどん食べるよう進めた。

「これ、だしは市販の物じゃないですよね？」

「一応料理本に書いてあったの見て作った」

作り方も難しくなく、それでいて美味しく出来たのならまさに料理本様々だな。

その後も逢は美味しいと言いながら食べ、量は少な目にしていたとはいえ見事完食してくれた。

「ごちそうさまでした」

「お粗末さま」

俺は空いた食器を下げ、その後薬を持っていき逢に飲ませた。

「先輩、私そろそろ……」

薬を飲み、一息ついたところで逢が言った。

「トイレか？」

「違います！ そужゃなくてそろそろ私家に……」

言いながら逢はそのそと布団から出ようとしていた。

「馬鹿、そんな状態で帰せるわけねえだろうが。熱だってまだあるし」

薬を飲んである程度熱は下がったとはいえ、まだまだ平熱より大分高い。そんな人間を一人家に帰せるわけなかった。

「ですが、今日一日で先輩にも大分迷惑をかけていますし……」  
「そういうのは治ってから言え。いま帰ってまた熱がぶり返ったりしたらそののが迷惑だ。わかったら今日はおとなしく泊まってけ」  
「でもそれじゃあ先輩はどうするんですか？ ベッドだって私が独占しちゃってますし」

逢は申し訳なさそうにしながら不安材料を述べていた。  
とそこで、俺に軽いイタズラ心が芽生えた。

「じゃあ一緒に寝るか？」

「はえ！？」

逢の予想以上の反応に、俺は楽しくなって更なる追撃を試みた。

「いや〜お前がそんなにも心苦しいってんならそれも一つの選択だぞ？ そのベッドセミダブルだし二人くらいなら多分寝れるぞ」

「そ、そそ、そんなのダメに決まってるじゃないですか！ わ、私たちそ、そういう関係じゃないですし、先輩は変態だし！」

別に変態じゃねえよ。

「別に良いんじゃない？ ただ一緒に寝るだけだ、別に変なことしようってわけじゃねえだろ？」

「当たり前です！ じゃなくて、どっちにしる一緒に寝るなんてダメです！ 第一、一緒に寝ても私の風邪が移ったら……」

からかっている時の逢の反応は面白いがそろそろやめとくか。これ以上やったらなんか取り返しつかないことになりそうだし。

「それじゃあやっぱ別々に寝るしかねえな」

「は、い……？」

突然素に戻った俺に、逢はついてこれなかったようだ。

「だって風邪が移ったりしたら嫌だろ？　じゃあやっぱり別々に寝るしかねえだろ」

「……そ、そうですね、それがいいですね……」

何故か若干寂しそうに見えたのは気のせいだろうか。

まあなんにせよ、逢がこの家に泊まるのを了承したようなのでこれでもいいだろう。

「じゃ、決まりだな。そういうことだから俺はリビングのソファで寝るわ。お前はそのままベッド使ってくれ」

「え、あ……」

「なにかあったら携帯でもいいから言ってくれ。そんじゃ俺は向この部屋に行くから、お前は安静にしてろよ」

「せ、せんぱ……」

一方的に捲し上げて俺は部屋を出た。ちよつと強引だったかもしれないな。

ま、このくらいやんないとあいつも強情だから頷かないだろうし。つたく、自分が病人だつてことを理解しろっつーの。普段大人っぽいつつーか冷静な癖にこういうときは子供っぽいつつーか。いやまあ年齢的にまだ子供なだけどさ。

その後もちよくちよく逢の様子を確認しつつ時間は過ぎていった。部屋にいく度に逢は何か言いたそうな顔をしていたが、次第にそれも治まり……というか諦めたようだ。

夜もだいぶ更け、今はだいたい十一時頃だろう。  
俺はベランダに出て空を見ていた。

特に理由は無いが俺はたまにこうして空を見上げている。  
ふと、背後に気配を感じて俺は振り返った。

そこにはこちらに来ようとしてる逢の姿があった。

「寝てなくていいのか？」

突然の声に逢は少し驚いたようだが、すぐに気を取り直し、俺のそばまでやってきた。

「熱もだいぶ下がったので大丈夫です。それに昼間に寝すぎたせい  
か今はあまり眠くなくて……」

確かに昼間あれだけ寝ていれば眠くもないだろう。  
それでもまだ横になっていた方がいいのは確かなんだが……

「先輩は何してたんですか？」

俺の考えを遮るようにして逢が聞いてきた。

「……特になにも。ただ何となく空を、な」

「空、ですか……？」

言って、逢もまた空を見上げた。

「……今日は星がよく見えますね」

「……そう、なのか……」

逢の言葉に、俺は素直に肯定することができなかった。  
そんな俺の反応に、逢は少し疑問を覚えたようだった。

「違うんですか？」

「……いや、違うない」

俺は逢の言葉に一応の肯定をした。

確かにこの街にきて見た中では、今日は星がよく見える日だろう。  
ただ……

「ただ、俺がこの街にくる前に見た空は、こことは比べ物にならないくらい星がよく見えたんだ」

この街とは違い、回りは山ばかりの田舎の町。そして俺はそんな山の中で、人工的な光の届かない、星と月明かりだけの空をいつも見ていた。

数えきれないほどの星が瞬き、手を伸ばせばその星に届きそうな、そんな景色。それを見慣れていたせいか、この街の空は俺には物足りなく感じてしまうのだろう。

「……いいですね、それ」

俺の話を聞いていた逢はそんなふうな感想を漏らした。

「……ああ」

ただ、その景色を見るためにはあの町へ行かなければならない。だが、いまあの町に行くのは少し躊躇われた。

俺自身が気にしないとしても、その町に住む他の人間が俺を気にしないとは思えないから。

まだ、すべてを忘れられるほどの時間は経ってないから。

そんな俺の内心とは裏腹に、逢はなんでもないことのように言った。

「いつかに観に行きたいですね」

「……は？」

「星ですよ、星。先輩が見たっていう景色、私も見てみたいです」  
逢の言葉に俺は暫し呆然としてしまった。

だが、すぐ気を取り直して、

「……そうだな」

俺は苦笑しつつそう答えた。

こいつと一緒にならそれもいいかもな。

いつか、そんな日が来れば……

「しかし大胆だな」

「はい？」

「だってこれ、デートの誘いだろ？ まさかお前にこんな積極的に誘われるとは思わなかったぜ」

「な、ばっ！ 別にそんなつもりで言ったんじゃないやありません！」

「照れるな、照れるな」

「照れてません！」

おお、凄い剣幕だ。思わず後退りそうになったよ。

そろそろやめないと不味そうだな。興奮し過ぎてまた熱が上がったから洒落になんねえからな。

「そろそろ部屋に戻ろう。こんな時間にベランダで騒いでたらご近所さんに怒られちまう」

「先輩が変なこと言うからじゃないですか……」

ぶつぶつと文句を言っている逢を連れ、俺は部屋の中に入っていた。

## 十九話

朝、誰かの近づいてくる気配で目を覚ました。

大方気配の主は逢だろう。

昔の修行のせいとか、いまだにこういつた気配などに敏感に反応してしまうのはもはや習慣みたいなものだ。

いついかなる時も警戒は怠るな、とは俺のじいさんの言葉だ。

いまの生活の中でそうそう警戒するようないことも無いと思うのだが、一度身につけた習慣はそう簡単には無くならないらしい。俺は逢の気配がそばに来るのを待ってから声を出した。

「もう起きてて大丈夫なのか？」

「っ！」

逢は寝ていると思っていた人間から突然声を掛けられ、体をびくりとさせて驚いていた。

「起きてたんですか？」

思いがけず自分が驚かされた事が不満だったのか、逢は責めるような声で聞いてきた。

「まあな」

俺はそんな逢の様子には触れず、適当に答えながらソファから身を起こした。

視界に写した逢の姿は、既にいつも通りの制服姿に着替えられていた。

「それで？ もう一度聞くけど体調は？」

「はい、もうすっかり良くなりました」

そう言った逢の顔色も良く、体もふらついたりせずしっかり立っ



ていることから俺はその言葉が嘘ではないだろうと思った。

「そうか、そりゃよかった」

「先輩には色々ご迷惑をお掛けして申し訳ありませんでした」

律儀に腰を折って謝罪する逢を見て、俺は思わず苦笑を漏らした。最初にあつた頃も同じように謝られたことがあつたなど。

ただ、あの時のように責任を感じ、自分を悲観するようなことが無かつたので、こいつも少しは変わったのだろう。

真面目なのは変わりねえけど。

「それでお前は今日どうするんだ？」

「はい、体調も治つたのでちゃんと学校に行きます。なので私はこれから一度家に帰ろうと思います」

「なんだ、このまま家から行けばいいじゃねえか」

「いえ、鞆の中身が昨日のままなので一度家に帰って今日の授業の準備をしなきゃならないので。それに、昨日はその……お風呂に入っていないので、それも……」

恥ずかしかつたのか、後半になるにつれ逢はだんだんと声が小さくなつていった。

「病み上がりだからあんま風呂に入るのはお勧めできないが……そうだ、なんならまた俺が拭いてやるうか？」

茶化しながら言った俺に、逢は冷ややかな視線を向けてきた。

「……先輩」

「すみません冗談です」

どうやら風邪が治つたのと一緒に、冷たい逢も戻ってきたようだった。

「まったく……それじゃあ私は家に戻ります。いつもの時間になっ

たらまた来ますんで」

「そうか、それじゃあ俺はもう一眠りすっかな」

先程時計を確認したらまだ朝の六時をまわったところだった。二度寝をするには十分時間がある。

そんな俺を見て、逢は呆れたように溜め息をついたがそれ以上は何も言わず、失礼しますと言って家を出ていった。

あれから普段と変わらない、と言ったら語弊があるが、ここ最近では当たり前となった逢との朝の一連を終え、俺達は学校へと向かった。

途中知り合いに会うこともなく、そのまま二人で学校へ着き、別の挨拶をしてそれぞれの教室に向かった。

教室に入ってすぐに大和と千里がやって来て昨日休んだ理由を聞かれた。

二人には昨日の朝のうちにメールで『今日は休む』とだけ連絡し、その後は連絡を取っていなかった。

千里からは何度か連絡があったがその都度タイミングが悪く、返事をする事が出来なかった。

「それで？ 昨日はなんで休んでたんだけ？」

大和からの質問に、俺は特に隠す必要は無いと思い、昨日の出来事を簡単に二人に話した。

「……大変だったみたいね。それで？ 石動さんは大丈夫なの？」

「一応な。今日はもう学校にきてるぞ」

つつても病み上がりだからな。完全復活とまではいかないだろうけど。

「そう、良かった……」

千里は安堵したのか心配そうだった表情を弛め……たかと思いきや、すぐさまジトリとした視線で俺を睨んできた。

「それはそうと慶介。あんた石動さんに変なこととかしてないでしようね？」

「あ？ 変なことってなんだよ」

「それはもちろん、弱って動けないのをいいことに慶介が逢ちゃんに無理やり良からぬことを……」

「するわけねえだろーが」

「たたく。千里たちは知らないとはいえ、あんなにも甲斐甲斐しく世話をしたというのにこの扱い。」

倒れた逢を運んだり、薬を買いに奔走したり、なれない料理を作ったり、ご飯を食べさせたり、『窮屈な制服を着替えさせ、汗をかいた体を拭いてやったり』と、こんなに頑張ったのにも関わらず疑われるとは。

「……ねえ、なんかいま不穏なものを感じただけど？」

「気のせいだ」

モノローグに『』とか付いてないから、気のせいだから。

それにしても、

「まったくお前らは。人をなんだと思ってるんだ。相手は病人だぞ？」

俺は二人に呆れた顔をして言った。

「だって……女の子とずっと二人きりなんて……」

千里が一人で何か言っていたが、声が小さくて聞き取れなかった。聞き返そうとするよりも早く大和が入ってきた。

「でもさあ、男ならこうガァーってなったりしなかったわけ？」

「お前みたいなクソ野郎と一緒にすんじゃねえよ」

「ひどっ！　そこまで言うこと無いじゃん！」

大和のようなアホは放っておこう。

それにしてもここまで信用が無いとはな。俺のような善良な人間は世界中探したって見つからないというのに。

ん？　いま鼻が少し伸びたような……気のせいかな？

「そついやさあ、最近街の中に変な奴ら増えてきてるよな」

「変な奴ら？」

俺は唐突な大和の話に聞き返した。

「なんか敵ついつつーか、こう柄の悪い奴らがさ」

「あたしもそれ思った！　昨日の帰りとかも何人か見かけたし」

大和の言葉に千里も覚えがあったようだ。

かくいう俺も、話を聞き少し前に気になっていたことを思い出した。

「うちの学校じゃないけど、他の学校で何人か絡まれた奴もいるらしいぜ」

実質的な被害も出てるのか。学生警察はこの事を知ってるのか？

「私達も気をつけないとね」

「……そうだな」

確かに、周りの人間に被害が出る前になんとかしたほうが良さそうだな。

ここは逢、いや替華辺りと一度話をしてみるか。  
なにか面倒なことになりそうだが。

放課後になり、合流した俺と逢は気持ち足早に学生警察へと向かった。<sup>ガード</sup>

道すがら逢に話を聞くと、どうやら逢のクラスでも同じような話があつたらしい。

やはり街の様子の変化に他の人間も気づいているということか。

「今日は少し急ぎましょう。早くこの事を所長に聞きにいかないと自分が気づかないうちに良からぬことが起きていたことと、そんな中で休んでしまったという焦りか、逢は学生警察への足取りがだんだんと速くなっていた。

仕方なく俺もそれについていっていたのだが、

「ちょっと待て」

突然に呼び止めた俺に、逢は立ち止まって振り返った。

「なにかあつたんですか？」

神妙な顔をしている俺をみて、逢は何事かというような顔した。

「ちょっと喉渴いたから飲み物買ってきていいか？」

「は？」

俺の言葉に、逢は「なに言ってるんだコイツ」みたいな顔をした。た。

だが俺にもちゃんと理由はある。

今日は湿度が低いのか空気が乾燥していてやけに喉が渴くのだ。しかもいまは炭酸な気分だ。喉を潤し、且つ炭酸のシュワツとする爽快感が味わいたい。

しかしそんな俺に逢は、

「我慢してください」  
無慈悲にもそう言った。

「ちょ、なんでだよ。大丈夫だって、パパっといって買ってくるから」

「ダメです。この辺自販機もコンビニも無いんですから。あるところまで戻ると時間が掛かります。それに学生警察に行けば給水機も自販機もあるんですからそこまで我慢してください」

逢は「急ぎますよ」と言って先に進んでしまった。

倒れたときはあんなに素直でいい子だったのに治った途端これが

……

俺は一抹の寂しさを抱きながら逢の後についていった。

学生警察に着いてすぐ、俺達は会議室へいくように言われた。いきなりすることに疑問を感じつつも俺達は会議室へと向かった。

「きたか」

俺達が会議室に着くと、そこには慧華を始め、既に学生警察の他の面々が揃っていた。

「みんなお揃いでどうしたってんだ？」

会議室に集まってる奴の中には今日は非番の人間もいた。

一体これだけの人数が集まっていまから何をするというのか。

その疑問には慧華が答えた。

「そのことだが、いまから緊急会議を行う」

「緊急会議、ですか？」

慧華の言葉に逢も驚きを感じているようだ。

「緊急会議って、なんかあったのか？」

「それを今から説明する。君達も早く席に着きたまえ」  
言われ、俺達は後ろの空いている席へと座った。

俺達が座るのをみてから慧華は話を始めた。

「それではこれより緊急会議を始める。今日君たちに集まってもらったのは他でもない、ここ数日のうちに増えた通報や苦情の件についてだ。気づいている者も要るかも知れないが、最近街の中に柄の悪い連中が増えてきている。その影響があちこちで恐喝や暴行などの被害に遭ったものが多数出てきている」

「先輩、これって……」

慧華の話は今日俺達が聞いたのと同じものだった。

「どうやら慧華達も気づいてたみたいだな」

「というかそんなに苦情とかもきてたのか。俺達が知らないだけで被害は意外に多いらしい。」

「それを受け、我々は調査班に依頼してこの街の現状を調べてもらった。その結果わかったことがある」

調査班か、そんなものまで要るんだな。

俺は話の内容とは違うところに感心していた。

「実はいまこの街で起きていることにはとある二つの不良グループが関わっているようだ。一つは『JOKER』というグループ、もう一つは『阿戯斗<sup>アキト</sup>』というグループだ。この二つのグループの抗争が今回の問題に繋がってくる」

慧華の話聞いた学生警察の面々は一様に戸惑いの表情を見せていた。

そもそも不良の喧嘩が何故、街にいる一般の学生に被害を及ぼし

ているのかというのが気になる。

会議室がざわめき出したところで慧華の声が響いた。

「静粛に！ これから何故このような経緯になったのかを説明する。まずことの発端は両グループによるほんの些細ないざござから始まったらしい。いざござ事態は下っぱどうしの喧嘩で、その喧嘩は巡回中だった学生警察によりすぐに止められたようだ。だがその喧嘩で起きた火種を無理やり大きくしようとした者がいた。それが片一方のグループ『阿戯斗』だ。『JOKER』の方は所詮は下っぱの喧嘩ということで争う意思は無いらしい。というより『JOKER』自体好戦的なグループではなく、仲間内で集まって面白可笑しく騒いでるだけのグループのようだ。しかし『阿戯斗』の方はそうではなく、好戦的で恐喝や暴力も平気で振るう典型的な不良グループだ。そして別の不良グループである『JOKER』の存在も前から気に入らなかつたらしい。そこに丁度よく今回の喧嘩騒動があり、それを気に『JOKER』というグループの排除、もしくはグループ自体を取り込もうと企んでいるらしいのだ」

なるほどね。じゃあ街にいる連中は『阿戯斗』の連中で、大方『JOKER』への牽制、あるいは威嚇で、恐喝は戦闘資金の調達といったところか。

なんともまあ迷惑な話だ。

「そこでだ、今回の緊急会議の本題。この街に起きてる被害をどうするかということなのだが……」

言葉を区切った慧華に皆の視線が集まっていた。

被害をどうにかするということは、やはり学生警察総出でことに当たると言うことだろう。

予想以上に事態は大事のようだ。

そして、慧華は全員の視線を受け、いつものように大仰に宣言した。



「我々はこの事態を受け、現在この街に実質的な被害をもたらしている『阿戯斗』の一斉検挙を実行する！」

ほう、一斉検挙か。慧華も大胆なことをするな。

ここに集まっている他の学生警察の奴らも慧華の発言に驚きを隠せないようだった。隣に座る逢もそれは同じだ。

でも戸惑いはすぐに治まり、それ以上に皆やる気になっているようだった。

だが言うほど簡単ではないだろう。

相手はそこら辺にいる奴らと違って喧嘩慣れしてる筈だし、人数だつて結構いる筈だ。

さすがに難しいと思うが……。

まあ慧華にも何かしら作戦があるのだろう。

俺はそれを聞くために慧華の言葉に耳を傾けた。

「それでは、今回の一斉検挙に辺りその作戦を説明する。だが作戦と言っても至極簡単だ。今回の作戦では、奴らの根城にしている場所を叩く。今回、調査班の働きにより、『阿戯斗』が溜まり場になっている場所が判明した。そこを我々学生警察の総力を持って完全包囲し突入する。突入部隊については本部、支部よりこちらで抜選した人員によつて編成する」

支部からも人員がくるのか。そうとう大掛かりな作戦だな。

真治や山寺達もやる気になってるみたいだし、みんな仕事熱心だな。

「作戦の結構日は四日後。詳細については前日の会議で話す。今日からの見回りは人員を増やし、今まで以上に強化して行く。各自気を抜かないようにしっかりやってくれたまえ。それでは緊急会議を

終了する、解散！」

会議の終了と同時に、皆期待や興奮の入り雑じった表情で部屋を後にしていった。

俺達も見回りに行くために部屋を出ようとしたところで慧華に呼び止められた。

「そついえば逢君、体調はもういいのかい？」

「はい、お陰さまで。昨日はお休みしてしまい申し訳ありませんでした」

「気にしなくていいよ、風邪なんていつ引くか分からないからね。

それよりも治って良かったよ、今日からは少し忙しくなりそうだからね」

慧華の言葉に逢も神妙な顔つきになった。

「そついや俺達も突入部隊には入るのか？」

俺の質問に慧華は首を横に振って答えた。

「まだ部隊の編成はこれからだが、多分逢君と君は突入部隊には入らないよ。元々逢君は荒事担当ではないし、君はまだ新人だ。それに支部からも人員は来るからね。君達は当日、街の見回りになると思うよ。いくら一斉検挙といっても全ての人員を連れていって街の警護を疎かにするわけにはいかないからね」

「そりゃ確かにな」

目先のことばかりに囚われて、本来の役割を忘れてちやもともこ無いからな。

まあ俺としても街の見回りしてた方が楽でいいし。

「それじゃあ今日からの見回りはいつも以上によろしく頼むよ」

「はい！」

そつ言って慧華は先に部屋を出ていった。

俺達も後を追うように部屋を出て見回りに向かった。

見回りに出てすぐに、俺は自販機を見つけて駆け寄った。

「これこれ、これだよ！ やっと買えるぜ」

そう言っただけ俺は財布から小銭を出し、投入口に入れていく。コーラのボタンを押し、ゴトリと音をたてて出てきた缶を取り出し、プルタブ開けるとプシュツと炭酸の抜ける音がした。俺はすかさず一口飲み、

「かぁ！ うめー!!」

口の中で弾ける炭酸、喉の奥が焼けつくようなこの感じ。生きてるって素晴らしい！

「突然走り出したかと思ったら……もう、仕事ですよ……」  
後から追い付いてきた達が、俺を見て呆れたように言った。

「んなこと言っただってしょうがねえだろうが。結局学生警察の中でもなんも飲めなかったんだから」

ついてすぐに会議室にいかされたせいで結局飲み物を買う時間が無かったのだ。

「はぁ、さっき会議でも見回りを強化するって聞いたばかりじゃないですか」

「まあ細かいこと気にすんなよ」

「先輩は少しくらい気にしてください」

いいじゃねえかよ飲み物くらい、これだから真面目ちゃんは……。

「ほら、いつまでも立ち止まってないでいきますよ先輩」

「ハイハイ」

逢に促されて俺はコーラを飲みながら付いていった。

歩いていると何処かからか微かに声が聞こえた気がした。

「先輩、今声が聞こえませんでしたか？」

逢も聞こえたということはどうやら俺の幻聴では無いようだ。

俺は声の出所確かめようと耳を澄ましてみた。

すると、五メートル程先に見える路地裏の方から声が聞こえてくるのが分かった。

「多分、あそこの路地裏からだな」

「路地裏ですね！」

逢は場所を聞くや否や止める間もなく駆け出していった。

これが昨今の不良ならともかく恋人同士の逢瀬とかだったらすんだよ。めっちゃ気まずいじゃん。

そう思いながらも俺は仕方なく逢の後を追った。

まあ結果的には逢の予想はあっていたようだ。

俺が逢に追い付くより早く、逢の声が聞こえた。

「あなた達、何をやっているんですか！」

俺も追い付き、逢の後ろから路地を覗いた。

そこには厳つい風貌の二人組と、壁に背を預け二人と向かい合うようにしている気の弱そうな学生が一人いた。

状況からみてカツアゲでもしようとしていたのだろう。

二人組は俺達をみて威嚇するように声を荒げた。

「ああ？ んだよテムエ等？」

「調子こいてシャシャツてつとやっちまうぞ！」

おお！ まさに不良って感じの奴らだな。

俺が変なところで感心していると、逢は不良達に怯まずに宣言した。

「私達は学生警察ガードです！ あなた達を恐喝の容疑で逮捕します！」  
その逢の言葉を聞き、不良達の顔色が変化した。

「な、お前等学生警察か！？」

「お、おいどうする？」

不良達が狼狽していると、襲われていた学生がタイミングを見計らって声を出した。

「た、助けてくださいー！」

学生は逢が学生警察ガードと知り、すかさず助けを求めた。  
いやまあいくら逢が学生警察ガードだからって女の子に助けを求めるのもどうかと思うけどな。

俺はコーラを飲みながらそう思った。

だがここで逢が失敗だったのは、名乗るのが早すぎたということだ。

相手との距離が離れていて向こうが何か行動した時にこっちの対応が間に合わなくなってしまふ。

そしてそれはそのままの通りになった。

「おい、学生警察はさすがに不味い。逃げるぞ！」

「お、おうー！」

自分達に部が悪いと思ったのか、不良達は路地の反対側へと逃げ

出そうとした。

「ま、待ちなさい！」

逢も咄嗟にそれを追おうとした。

だが、不良の一人がそれを阻もうとしたのか、襲っていた学生を逃げる際に逢の方に向けて突き飛ばした。

「うわっ！」

「きゃっ！」

逢は咄嗟に学生を受け止めようとしたが、万全の状態ならまだしも病み上がりということもあってかさすがに男一人を受け止めきれず、そのまま後ろに倒れてきた。

そして倒れてきた逢はタイミング悪くコーラを煽っていた俺にぶつかった。

「ぶっ！！！」

俺は逢にぶつかられた衝撃で飲んでいたコーラが気管に入り、盛大に噎むせた。

「先輩、なにやってるんですか！ 早く追ってください！」

「ゴフツ！ ガハツ！ ヒュー、ヒュー、ゴツホ、ゴツホ！ ハヒー、ハヒー、オエツ！」

無茶言うなよ。気管に入って噎むせてるのに加え、飲んでたのが炭酸飲料だったせいで喉が焼けつくように痛いし、噎むせた拍子に逆流したコーラが鼻を通して穴から出たりしてる俺にそんなことできるわけねえだろうが。

そうこうしているうちに不良達は逃げ、路地には倒れた学生と逢、そして前屈みて壁に片手をつき、目から涙、口と鼻からコーラを撒き散らしながら噎むせている俺だけが残っていた。

「はあ、まったく先輩は肝心なときに役に経たない人ですね」  
歩きながらも逢はずと俺を責めていた。

「いやいや、あれは半分位お前のせいだろ」  
誰のせいで噎せたと思ってんだよ。

「あんな場面でコーラなんか飲んでるからじゃないですか。そもそもあの状況で飲んでること自体おかしいですよ」  
反論のしようがない逢の言葉に、俺は黙るしかなかった。

その後、すぐに学生警察に連絡をし、絡まれてた学生に事情を聞き、俺達が来るのが早かったため何も取られずにすんだというのを確認した。

学生には、なるべく人通りの多い道から帰るように言って別れ、俺達は再び見回りに戻った。

「それにしても、こんなに早く遭遇するとはな」  
学校や学生警察で話を聞いた後に実際に現場に遭遇するとは。運がいいのか悪いのか。

「まあ結局逃げられちゃいましたけど」  
「しつげえなあ、人が話題変えてんのに引つ張んなよ」  
「それは先輩が言う台詞では無いですね」  
いつまでも根に持つ奴だなあ。

「それはそうと、やっぱり所長の判断は正しかったみたいですね」  
「なにが？」

「見回りの強化ですよ。私達がこんなに早く事件に遭遇したというのはそれだけ事件が増えていってことじゃないですか」

「まあな」

「これから一斉検挙まで、私達も忙しくなりそうですね」

「はあ、面倒くさいことこの上ねえな」

「まったく、阿戯斗だかなんだかしらねえが余計なことしてくれたぜまったく。」

俺は一斉検挙の日までのことを考え、気が重くなるのを感じた。



## 二十話

路地裏でのことから三日。今日は一斉検挙の前日だ。

路地での一件があった当日は各所で数件の検挙、あるいは俺達のように逃がしはしたものの事件を未然に防いだという報告が多数あった。

だが向こうもその事で街の警備が厳しくなったのが分かったのか、その日以降表ざった事件は殆ど無くなった。

だからと言って警備を緩くするといったことは無く、それ以降も街の警備強化は続けられ、そして今日。一斉検挙を明日に控え、これから最終会議が行われる。

「それではこれより作戦会議を始めます」

前回と同じ会議室に集まった学生警察の面々は緊張した面持ちで慧華の声に耳を傾けていた。

「前回の会議から三日、君たちも既知のことかと思うが既に多数の逮捕報告がきている」

この中に実際に捕まえた者もいるのか数人が神妙に頷いていた。

「初日以降向こうも我々の動きに気づいてか、街での事件は目立たなくなつた。だがそれで事が終わつたわけではない。そもそも目的は『阿戯斗』の暴動の阻止だ。今はまだ動いていないがいつ奴らが行動にでるか判らない。もし街中で暴れられでもしたらそれこそどれ程の被害がでるか……。それを阻止する為にも早急にこの事態に対処する」

慧華の言葉に皆一様に顔にやる気を見せていた。

「手元にある書類を見てくれ。そこに調査班が独自に調べた『阿戯

斗』に関する情報が書いてある。現在奴らはエリア1の最端さいはしにある使われていないビルを根城にしていることがわかった」

後で逢に聞いて知ったが、この街ができる最にいろんな場所で街開発が行われ、その最に資金不足等によって開発が放棄された場所がいくつもあり、エリア1最端さいはしもその一つだそうだ。

「しかもどうやら、奴らは既に抗争に向けての準備をほぼ完了しつつあるようだ」

慧華の報告に会議室に一瞬ざわめきが走った。

「こちらの予想よりも大分行動が早いようだあすが明日、予定通り我々は奴らのアジトに出向き、一斉検挙を実行する。編成などについてはこの後説明するがその前に各自この書類をよく読んでおいてくれ」  
そう言っつて慧華の話は終わり、その後は指示された担当ごとに集まり当日の編成等について話をした。

俺と逢は前に慧華に言われてた通り当日は街での見回りだった。

特に変わったことはなく、大体いつもと同じように見回りをしていけばいいらしい。

それでも普段よりは気を張って警戒にあたれとのことだった。街中に逃げた不良が一般人に被害をもたらす恐れがあるからだ。

そんな感じで俺達の方の話し合いは終わったが、突入部隊やその補助をする係は、俺達と違い細かな作戦等があるためそのあとも会議が続けられていた。

なので俺達は一足先に解散となり、帰宅することになった。

「いよいよ明日ですね……」

「ん〜そうだな」

やる気と緊張が混じった声で言った逢に俺は適当に相づちをうつた。

「つつても俺達がやるのは普段と変わらず街の見回りだけだな」  
「だとしても、明日は今までに無いくらい大きい仕事です。私達もいつも以上に頑張らないと」  
「逢はともかく別段俺はいつもそんなに頑張つてないけどな。」

「先輩も明日はしっかりやってくださいな」  
念を押すように逢に言われ、俺は深々とため息を吐いた。

「はあ、めんどくせ……」

.....  
.....  
.....

「……準備の方はどうなってる？」

「武器の方は一通り揃ってます。ですが……」

「ああ？ なんだ？」

「実はここ数日の内に数人の者が学生警察ガードによって捕まえられちまっています。どうやら街で動かしてた下っぱ連中が少し派手に動きすぎたようで……、そのせいで学生警察ガードの連中が街の警備を強化してみたಿದೆ」

「これからの行動に支障はあんののか？」

「戦力面では問題はありません。捕まったのも下っぱの奴らなのでそれほどダメージはありません。ただ、今回のことで学生警察が警備を強化したということは、向こうもこちらの動きについて何かしらの情報を得ているのかもしれない」

「ここにきて第三者の介入か。チツ、面倒な連中だ」

「これ以上学生警察に動かれる前にこちらも動いた方が良さそうですね」

「そうだな……。よし、ここに幹部共を集める。これからの行動について会議を行う」

「了解です」

.....  
.....

二十話（後書き）

久々更新です！！

待っていてくださった方申し訳ありませんでした。><

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8016u/>

---

怠惰な先輩としっかり者の後輩。

2011年10月19日23時45分発行